

如
是
經
卷之一

特 228

220



2

0002286-000

特 228-220

如是經

武市如意・著

北信毎日新聞社

卷之1

昭和11

AAC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

第28
220

卷之二

序言

本篇輯録する處は、今春二月中旬より約二ヶ月に亘り執筆、北信毎日紙上に掲載したる拙文である、匆率の執筆、元より推敲の足らざるものも少なく無いが、然かも是れ私の主義、主張、平素の懷抱の一端を發表したるもの、御通讀、御批評を賜はらば、此上も無い仕合せである、拙詩一首を附記す。

憂時有淚獨沾巾、自首自憐衰老身、猶是倔強從筆硯、文章報國一精神、

昭和十一年十月下旬

於北信毎日新聞社

寬山 武市 如意



【一】
今度の選舉は、なか／＼にぎやかである、五百名たらずの定員に、九百名ちかい候補者、多土濟々と云はふか、然かもその人物に至つては、概して甚はだ優等ならず、中には御免を蒙りたい様な人物も相當にある、末法の世と云はんか。

□
箇様の候補者に熱を上げる選舉人に對し、肅正選舉の實を擧げよと云ふ、果して其目的を達成するとが出来たらふか、信仰心の絶無ともいふべき候補者や、選舉人に向つて、肅正即ち良心的行動を望んで見た處で、夫れは駄目のと。

□
第一九百名に近い候補者中、眞に國家の爲め、國民の爲めに力を盡して見たいと云ふものがどれ程あるだらふ、昔國事の爲めに奔走した志士と云ふもの、中には、管に名利を度外視して居たばかりで無く、身命をも投げ出して懸つたものが、決して少なく無い。

□
苟くも誠心誠意國事に盡さんとする者としては、爾かあるべきが當然のことである然るに、昨今我國に於ける議員など云ふもの、多くは、だゞ名利あるを知つて、國

家、國民あるを知らないと言ふ様なものばかりである、其型に於て、全く雲泥、月籠の差がある。

□
それば時代が遠ふから仕方が無い、と云ふものもあるだらうが、苟くも國を憂ふるものとしては、時代の如何に拘はらず、身命を賭して、國事に盡すといふ大覺悟が無くてはならぬ、命が惜しい、名譽、利益が欲しいといふやうなものに、ろくな者は殆んど無い。

□
其處で選舉肅正に先ちて、考へなければならぬのは、候補者の選擇である、若し候補者の選擇を誤れば、如何に見事な選舉を試みた處で、之を國家の盛衰消長の上から見るに於て、殆んど何等の意義をも成さぬ、夫れでは選良の意味は、皆無であらふ。(昭昭十一年二月十二日)

〔二〕

法律の根據は、道徳に在りと云ふ、然るに今日の法律は、其行爲に現はれたと以上、即ち形而上的制裁力に至ては、殆んど見るべきものが無い、昨今漸く喧しく爲つて來た、舉舉取締の如きも、矢張り其境域を彷徨して居る、夫れでは眞の取締は

出來ない。

□
法律の眞の効力は、刑而上、即ち精神的制裁力の發現に依てのみ全うすることが出来る、法律にして精神作用を無視せるものは、如何なる行爲と雖ども、精神作用に待たざるもの無き人間に對し、完全に制裁を加へ得る力は、殆んど無いと申しても宜しい。

□
併し、法律は、何處までも法律である、決して宗教でも無ければ、哲學でも無い隨つて精神的制裁力は、甚はだ薄弱である、嘗に選舉取締法ばかりでは無い、總べての法律が、明白に夫れを物がたつて居る、選舉肅正の効果の少なき、亦怪むには足らぬ。

□

選舉肅正、夫れは無論結構のとである、何處までも肅ましく正しく遣るのが、選舉を意義づけるとに相違ない、併し今日の様に墮落、腐敗し切つて居る選舉界——選舉人に、果して能く之を受納れ、實行するだけの精神力、即ち信念があるだらうか疑問だ。

今日の選舉界は、確かに墮落、腐敗して居る、今日の選舉人には、確乎たる良心が無い、換言すれば人間的、國民的、大和民族的信念が無い、ばかりで無く、選舉に對する認識が不足である、選舉を観るに、お祭さわぎ的觀念を以てするものが、其大半である。

其處で考えさせられるのは、如何にすれば、選舉人をして覺醒せしむることが出来るか、と云ふとである、信念喚起の外、好手段はあるまい、信仰心涵養の外、巧方便はあるまい、夫れには、どうしても宇道家——佛教徒、神官等の奮起を望まざるを得ない。

〔三〕

(前略)さて今回は活字を御入替へ、紙面御刷新なされ候御快舉、誠に欣喜の至りでありませ、茲に慶賀申上ます、近來老兄のお筆に成るもの紙上に之なきやう拜され候處、刷新紙上『如是經』を拜見し、相變らざる御風骨の狀を偲び、御身と御社と俱に、いよく御健勝の程慶賀申上ります、拜白。

此短簡は、在前橋の故舊豊國覺堂君からの近信である、舊友からすると、時に紙上に、私の筆の見えないのは、何となく寂しさを感ずるものと見え、其他からも時折り、何か書く様との御注文がある、私もとつて已に七十三歳、世間からは老人あつかひにされてる様であるが、私自身に在ては、夫れほどの年よりであるとは思つてゐない。

只少し年をとつたかなと思はれるのは、若い時分に比べると、起居動作が、より嚴肅に爲つて來たと、聊か口やかましく爲つて來たと、夫れであるが、讀書癖の衰へないのは、まだ先きのあるのを自覺するに足るやうな氣がして、甚だ愉快である、と申したからとて、最終の覺悟の無い譯ではない。

私には、小供の時から、一つの病氣がある、夫れは筆硯病とでも云はふか、又文筆病とでも云はふか、十五六歳、初めて小學校へはいった翌位から、時に觸れ、折に觸れ、下手な文章を書くのが、何よりも樂みでつた、私に其系口を付けてくれたのは、小林鼎、仁戸田達觀、倉本樸山など云ふ先生方で、殊に樸山先生には、漢詩を教へてもらふた。

又礫山先生や小林先生などは、私の生活問題に就ても、非常に心配して下さつて、私が十六歳の六月から、七十三歳の今日に至るまで、獨學自修の出來たのは、全く兩先生の 後援、御指導に由るもので、已に地下の人と爲られた兩先生に對しては、何時までも感謝の誠意を捧げなければならぬ、但し其他にも、私を救つて下さつた人は、澤山ある。

私の今日の境界は、實に多忙である、別けても心せはしいとおびたゞしい、第一貧乏世帯のふりまはしに忙殺されてゐる、今や世の中を擧げて不景氣である、生きて行くには、無くてならぬ米、みそに至るまで、其賣れ行きが面白くないと云ふ、うその様な話してあるが、實際について聽いて見ると、さうである。

新聞代の上りの悪いのも、廣告申込みの少ないのも、無理からぬとて、好景氣の時ですら、經營困難な新聞業——無學無智をもつて、夫れに當つて居る私が、貧乏せはしいのは、當然過ぎるほど當然のとである、夫れでありながら、恐ろしいもので、着いた癖は、なか／＼なほらない、自分ですらあきれる位だ。

其癖と云ふのは、前にも申した讀書癖だ、終日何か角にか、社務に携はつて、漸く夫れが了ると、今度は、居室の掃除だ、入浴だ、晩飯だ、日記をつけるのだ、それから書物を読む、大抵九時半のラヂオ時報を合圖に巻を投げる、さうしてニュースなど聽いて就寝するのが十時ごろ、寸隙も無いと云ふ有様だ。

書物の一番好きなのは、佛教に關するものだ、その次ぎが儒書、夫れから經濟書と云ふやうな順序だ、時に詩も作つて見るが、いたづらに頭を悩ますばかりで、傑作どころか、ろくなもの一ツ容易に出來ない、まあ斯う云ふ日常が、私の多忙な生活である、人しれず苦勞して居る私の病的境界である。

夫れで一番好きな佛書を書く隙が無い、と云ふのは、私ども新聞經營者としてはどうしても一應天下の大勢を研究して置くの要がある、政治、經濟などに對する眼識を養ふて置くの要がある、であるから、座右寸時も政治、經濟、社會に關する書物をはなすとが出來ない、うるさいと極り無しだ。

元來私はパンフレット式の書物は、大きらひである、折角見るのなら、纏つた、しつかりしたものを見たいと云ふのが、私の讀書方針である、けれども境界柄ばかりで無く、時節柄からするも、さうばかりは行かないとがあるから、折ふしパンフレット式のものも繕いては見るが、どうも下らないやうな氣がしてならぬ。

今日の青年、寧ろ新智識家ぶつてるものは、古いと云ふことを、非常に嫌ふ、見方、解釋の仕方に依つては、古いには、如何にも時代おくれの嫌ひのあるものがないでもない、日に新に、日に日に新に、日に又新たなりで、日新と云ふとは、無論忘れてはならぬ、が、古いとでもまた悉く棄てゝはならぬ。

故きをたづねて、新しきを知る、過去なき現在は、絶対にない、現在無き未來は絶対に無い、三世因果の理法は、一切の事物を、的確に支配して居る、新しいと云ふとは、古いものゝ時代化されたものである、時代化されると云ふとは、古いものゝ化粧がへするものである、且らく之を絶対方面に見よ。

やかましいとは、且らくあき、私が佛書、儒書などを愛讀するのは、之に依て、

過去の時代、世情を知ると同時に、現在、未來の夫れを知るに、最も適切、便利であるからである、元來我國の時代、世情と儒、佛二教との關係は、決して淺近のもので無い、我民族思想の過程は、一體どう云ふ工合であつたらふ。

在松本の秋山白巖君からも、久々はがきを寄せられた、曰く「小生、本年七十二歳、幸ひにして心身共に頑健にて、日頃筆硯生活に精進まかりあり、曾て小生が畢生の事業として、独自の力を以て建立を計畫せる教育勸護碑も、此處數年揮毫行脚等に努力の結果、當市深志公園に碑の高さ五間のもの昨秋竣工を告げ本年五月十日除幕式を舉ぐるの運びと相成り居候御安神下され度候。」

豊國君も私よりは、一つ下の七十二歳であるが、秋山君もさうである、さうして秋山君は、書塾を開いて書生を養ひ、教育方面に貢献して居るが、豊國君は郷土史研究に没頭し、其研究團體を組織「上毛及上毛人」と題する機關雜誌を發行して居る、何れ筆硯に携はつて居ないものは無いと云ふ處に、私と切つても切れない因縁がある様に思はれる。

夕豊國君も、秋山君も温厚な樂天家である、私も悲觀者流では無いが、然かも二君の温厚な性質とは大に異なる處がある、私は寧ろ感情家である、夫れで平静な性格の持主たる二君と、年ひさしく交際し、年をとるに従ふて、互ひに相慕ふと高まつて來るのは、頗る不思議である、私は、自分の頑健を誇ると同時に、二君の愈々衰しやくたらんことを神かけて祈るものでうる。

【四】

肅正選舉は、良心選舉である、良心選舉は、信念に由る選舉、信仰心に由る選舉で無くてはならぬ、然るに、今日の候補者、選舉人に、それだけの信仰心があるだらふか、今日の候補者の大方は、名譽心、利益心の奴隸である、若夫れ多文の選舉人に至つては、或は候補者そのものより、より劣等な者であるかも知れぬ。

處が、其信念の喚起、信仰心の涵養には、相當の歲月を要する、到底當意即妙的効果を期待する譯には行かぬ、とすれば、所謂肅正選舉は、差當り望むとが出来ないと云ふとに爲る、と云つて、是までの様なみだらな選舉をさせて置く譯にも行かない、其處で問題は、どうすればいゝかと云ふとに爲る。

私の愚案は、二ツ三ツあるが、其第一は法律の力に依て、既成政黨に解散を命ずるとである、既成政黨の罪惡は、數へ擧げるとの出來ないほどある、贈收賄とか、詐欺、横領とか云ふ様な犯罪事件は、且らく別として、選舉界を攪亂、墮落させただけでも、其罪惡は、決して輕少のもので無い。

是まで、黨勢の擴張、政權の横奪を唯一目的に、情實請托、買收、脅迫等、あらゆる陋劣手段を弄して、選舉界を攪亂し、墮落させたのは、既成政黨ではなからふか、選舉界をして、今日の如く墮落、腐敗せしめたのは、確かに既成政黨である、又其既成政黨は、今日どんなことを遣つて居るのだらふ。

相變らず諸有る惡事を働いて居る、苟くも惡事らしい惡事、犯罪らしい犯罪にして、既成政黨が其背景に無いもの、直接間接に、夫れに利用されないものが、果してどれ程あるだらふ、既成政黨は、丁度ギャングのピストルの如きものに成り了つて居る、既成政黨は、政治的にも、社會的にも、また思想的にも、有害無益のものである。

にも拘はらず、憲政の常道は、政黨の力に依てのみ、完全に行ははれるもの、様に豪語放言して居る、私は茲に改めて問ふて見たい、是まで既成政黨が政權を握つたとは、決して兩三回に止まらない、其時どれほど國利民福に資益する様な計畫、施設をしたかを、私は、只既成政黨の厚顔無恥に驚いて居る。

【五】

歐、米諸國でも、政黨の弊害には、可なり困つてゐる様である、我國とは、全然建國の精神を異にし、随つて國體を異にする歐、米立憲國ですら已にさうである、歐、米諸國、否、諸外國にして、民本主義で無いものは、一ヶ國もない、元首そのものさへ、民衆の意思に依つて左右されるのが、諸外國である。

然るに、我國は、君民一體である、天皇即ち國家である、であればこそ、皇統連綿、動きなき三千年の國家を見るとが出來たのである、否、嘗に三千年の國家を見ることが出來たばかりで無く、天壤と共に窮りなき皇統の下に、天壤無窮の國家の彌榮をことごとくが出來るのである、是れ決して夢想では無い。

であるから、歐、米諸國の憲政の常道が、政黨の力に依て、完全に行はれるもの

であつても、夫れを其のまゝ移し來つて、丸呑みに我憲政の上に當はめ用ゐんとするのは、大々の錯覺である、歴史の價值を知らず、又我國の歴史の特質を會得するとの出來ない様な生半着な政客などには、這裡の玄味は到底わかるまい。

で、或ひは私の政黨撲滅論に對し、憲政運用の妙諦を知らないものであるなどと非難を加へるものがあるかも知れぬが、私からすると、左様のとを云ふものの、却て我建國の精神の何處に在るかを知らざるを憐まざるを得ない、斯く申す今日只今既成政黨は、早く己に多數の選舉違反事件を造り出しつゝあるではないか。

本月十日内務省の發表に係る違反事件は、百五十八件、五百十八名の多數に上つて居る、昭和五年二月九日の七百十四名に比すれば、約二百名ほど少ないが、同七年二月十九日現在の百三十二名に比すれば、三百八十六名の増加を示して居る、而して夫れが、概して既成政黨關係者であると云ふに至つては、慨歎の他あるを知らない。

今や縣下に於ても、追々違反事件が發覺し來らんとする様子であるが、夫れも亦

既成政黨側に多いと云ふとは、既發覺の事實が、明かに之を物がたつてゐる、斯る事實に對し、政友會や民政黨などは、如何なる顔を以て、多數民衆に見えんとするのであるか、一應問ふて置くの要がある。

以上の如く、政界を攪亂し、墮落させたのは、既成政黨である、既成政黨の罪惡は、決して輕少のもので無い、若し既成政黨の總裁などに、眞に大和魂、即ち武士道の心得があれば、疾うに腹でも切つて、明治大帝の御魂に對したてまつり、男らしく懺悔、贖罪の行動に出て居る筈である。

我憲法は、欽定憲法である、歐、米諸國の夫れとは、全然其根本精神を異にして居る、随つて其憲法に依て、制定された選舉法、選舉取締規則などが、諸外國の夫れと趣きを異にしてゐるのも、當然の話である、要するに、我國の憲法政治は、明治大帝の有がたぎ聖慮に由來するものであるといふとを、絶対に遺れてはならぬ。

然るに、既成政黨の態度はどうだ、名譽、利益の爲めには、何等顧慮する處なく情實、請托、買収、脅迫など諸有る陋手段弄をしてまで、選舉も勝を制せんと何ん

時もしのきを削つて、醜い戦を敢てするのである、私が既成政黨撲滅を叫ぶのも、所以なきにあらずだ。

或は、政黨が無くなれば、どうして國民の意思を取まとめるか、と云ふ議論が起つて來るかも知れぬが、そんなとは、心配御無用で、今日では、如何なる職業にしても、其職業を代表する職業團體が出來て居る、それを最う少し整理すれば、從來の政黨以上、都合のいい、有意義のものとなるのである。

夫れに、是までの政黨が、果して能く多數國民の意思を取まとめて居たか、代表して居たかと云ふに、決してさうで無かつた、國民の大多數、選舉人の八九割は、無我夢中で、選舉に對し、情實、請托、買収、脅迫などの爲めに、左むいたり右むいたりさせられてゐたのに過ぎなかつたのである。

立派に、政黨に籍を置いて居るものにして、其政黨の主義、綱領をすら少しも知らないものが多々ある、其處になると、職業團體に對する其職業者の認識はたいしたもの、其團體の目的の何處に在るか位のとほ、皆よく承知して居る、とすれば

職業團體をして其職業の利害意識を前提として、自己の代表者—代議士などを選挙せしむると云ふ方が、どれ程有意義であるか知れない。

政治の要諦は、何處に在るか、巧みに國民の正しい欲望—意思を、其政策、施設の上に採擇するのに在る、而かも其國民の欲望—意思が、概して其職業を基調とした上に在る以上、職業團體を土臺とした選挙が、如何に有意義であるかは、必ずしも多言を要せずして、自から明かなる處である。

然るに、從來の選挙は、何時も既成政黨に左右されたので、職業を基調としての意思が、少しも代表されなかつた、之を縣下の實際に見るも、歴々之を證明する事が出来る、本縣は山國である、農林を以て、其生命とする地方である、然るに、其農林地方民の利害問題を提げて、徹底的に其の意思を議政壇上に吼え立てたものは、至つて少ない。

其證據には、本縣農村の窮迫状態などが、夫れほどに爲政者の頭腦に響いて居ない、であるから本縣の農村は、年一年、窮迫に窮迫を重ねるばかりだ、即ち農産收

入は、段々に減つて行く、林野は次第に荒れて行く、借金は年々嵩んで行く、出稼人は殖えて行く、思想は悪化して行くといふ有様である。

是までの代議士も、其立候補の時は、蠶業問題がどうの、林野問題がどうの、負債整理がどうの、やれ工業の分布策だ、やれ更生策だ、振興策だと、或は印刷物の上は、或は演壇の上は、却々うまいと云ふが、偕て當選して了ふと、あとは野と爲れ山と爲れで、振りむいても見ないと云ふ状態である。

夫れも其はず、本来身命を賭して國家、國民のために働いて見やうと云ふ、至誠を以て乗出したものでは無く、ただ夫れ名譽、利益を目ざしての狂言に外ならないのであるからだ、何には兎まれ、本縣から代議士を出すのは、本縣民の意思を代表してもらひたいからのことではあるまいか、斯う考えて來る時、私は一步を進めて更に選挙區制と云ふことを考えて見たい。

選挙區制は無論選挙上の都合、即ち投票上の都合とか、其取締上の都合とか、來たものでもあらふが、然かも其理由の重大なもの一つに、地方に依りて、自か

ら其の職業が違ふ、職業が違へば、自から其心持ちが違ふ、其の違ふ心持、即ち違ふ意思を代表せしむるには、どうしても選舉區制に依て、代議士を選出せしめる様にしなければならぬ、と云ふことが無ければならぬ。

去る十五日午前十時現在の選舉違犯事件は、更に激増して、四百八十四件、千二百十四人の多數に上つて居る、而して其すべてが既成政黨に屬するものであると云ふに至つては、愛そこそも盡きはてた話である、然るに政友會は、去る十七日の東京日日新聞紙上に、大々の廣告を掲載、厚顔しくも贅を敲いてゐる。

曰く、國體明徴——機關說排撃、曰く、責任政治の樹立——憲政の常道復歸、曰く、自主的外交方針の確立——經濟外交の擴充、曰く、兵農兩全の實現——産業國防の併進、更に政友會時代に不景氣は無い、民政黨時代に景氣は無い、と吼え立つるを聽いでは、到底抱腹絶倒の外あるを知らない。

政友會は、夫れ自身に取つての好景氣時代、即ち 旦那筋に當る某財閥の好況に恵まれて、其操縦を豊富に給與された時代を以て、直ちに國民全體に取りても好

景氣時代であらふと、早合點——獨斷して居るらしい、敢て喧しい理屈を並ぶるの要は無い、且らく之を、其當時より今日に至る、本縣の實情等に問ふて見れば直ぐにわかる。

本縣の如きは、此二十年來、好況などと云ふ様のは、曾て無い、のみならず、一年一年、不景氣に追はれ、前段にも申したる如く、更生——とても復興などの見込みは、更に之なき状態にまで墜落して居る、政友會の連中には、斯る明白な事實が少しも見えないのであらふか、毫もわから無いのであらふか、無責任もまた甚はだし。

民政黨の態度にしても、之を政友會に比するに於て、五十歩百歩である、云はして置けば、何でも云ふが、眞に國を憂ひ、時を慨し、身命を賭して、國家、國民の爲めに盡し、上御一人の聖慮を安んじ奉らなければならぬ、と云ふ様な誠意は、何處にも之を見出すとが出来ない、實に慨歎に堪へない。

で、私は、本日の投票日に際し、改めて懸下四區の選舉有權者に對し、既成政黨

の無責任なる放言にだまされるな、既成政黨の慣用手段たる瞞着策に魅せられるな
何處までも明治大帝の大御心を拜戴、能く本縣民の意思を代表し、至誠以て國家の
爲めに盡さんとするものを採擇選舉せよと、嚴肅に警告して置く。

【六】

選舉もやう／＼濟んだが、今度の選舉ほど、寂しい選舉は無かつた、肅正の實効
が、何處まで舉がつたかは、まだ誰にも斷言は出來まい、此程申したる如く、一向
に信念の無い、良心の無い候補者に選舉人だ、夫れで肅正選舉が、注文通り行は
れば、世の中のとほ、夫れほど心配するには及ばない。

偕て其信念の喚起、信仰心の涵養のとであるが、我國の信仰問題は、之を諸外國
の夫れと同一視、考究するとは、絶対に出來ない、我國民の皇室に對する信念は、
何よりも森嚴である、何よりも堅固である、諸外國民が神に對する夫れよりも、佛
に對する夫れよりも、より森嚴、堅固である。

私は青年時代から、深く佛教を信奉してゐるのである、けれども、其信仰は尊皇
を第一義としての奉佛である、故に若し佛教の説く處にして、尊皇の信念に抵觸す

るものがあれば、其部分ば、全然之を排撃、放棄するに吝ならざるものである、私
からすれば、尊皇以上森嚴なる信仰は、何處にも無い。

信仰は、申すまでも無く、理窟では無い、超論理的のものである、野卑な語調で
はあるが、鯛の頭も信心からといふ言葉は、信仰を説破するに、甚はだ巧妙な言葉
である、信仰を論ずるものの中には、正信と迷信とを差別、細説するものもあるが
私の所見からすると、そんな議論は、採るに足らぬ。

基督教の信者をして云はしむれば、佛教は偶像教である、漫りに偶像を禮拜、信
念を捧げるのは、たしかに迷信である、と云ふ、私をして云はしむれば、そんな小
理窟は、西洋流義の宗教學者の常套論法であつて、決して正鵠を得た議論ではない
、元來信仰の終局目的は、何處に在るか、考えて看よ。

實行は、信仰から來る、仁義禮智、忠信孝悌、其實行は、到底之を信仰に待たざる
を得ない、説明の仕方は、色々あるだらふが、仁義禮智、忠信孝悌が満足に實行出
來れば、私ども大和民族の信仰は、已に十分である、私は夫れを尊皇奉佛の四字に

收約して、大衆的信仰の極意であると信じてゐる。

【七】

宗教にも、正しいものと邪なものがある、と云ふものもあるが、私の見る處を以てすれば、其邪なものには、決して宗教では無い、苟くも宗教と云はれるものは何處までも正しいもので無ければならぬ、故に最近問題と爲つて居る大本教の如きものは、もと／＼宗教を以て見るべきものではない。

大本教の教祖と云はれるお直ばアさんは、一種の精神病者である、同じ教祖と云はれるものでも、釋尊の様な、學問もあれば、修養もある、古今無雙の偉人もあれば、お直ばアさんの様な、無學問、無修養のものもある、夫れを一緒くたにして、同じ教祖の言葉を以つて呼ぶのは、大間違ひの骨頂だ。

お直ばアさんの手に成つたといふお筆先、私は、其全部を見たことは無いが、一寸見た處だけでも、餘りに馬鹿／＼しいので、只々あきれるの外あるを知らない、之を釋尊の説かれた五千餘卷の經文に比べたらどうだ、土臺問題にならないので、あるから、私は、初めから之を眼中に置かなかつた。

目下拘禁されてゐる王仁三郎の白状する處によると、其お筆先も、大半は王仁三郎の筆先に成つたものであるとのことだ、私の所見からすれば、夫がお直ばアさんの自筆であらふが、王仁三郎の僞筆であらふが、そんなことは問題で無い、もともと大本教そのものが、宗教として見るに足らないものなのである。

王仁三郎を筆頭とする、數にも足らぬ幾人かのものが、國體變革の目的を以て、同志糾合の運動をするなんてとは、實際片腹いたい話だ、我國體は三千年の大昔から、牢乎として微動だもしない精神の上に、嚴然として具現して居る、彼等の無認識も、其處まで來れば、寧ろ憐むべきで無からふか。

併し、左様の不届きものを、其まゝにはうつて置くと云ふことは、斷じて出來ない、當局が蹶然として起ち、其討滅に着手したのは、頗る喜ばしいことであるが、若し私をして、存分のことを云はしむれば、其着手が甚はだおそかつたのである、寧ろ當局の鈍感、不用意を責めざるを得ない。

神道を標榜して祈禱、治療などを主として居るものの中には、如何はしいものが少なく無い、夫れにさういふものゝ多くは、佛教の片鱗を捉へて、之に神道の臭味を附加し『般若心經』などを讀誦して、漫りに勿體をふりまく、と云ふ状態だ、又天理教の教典の如きにも、禪家の言草を加味した處がある。

夫れほど佛教に有難いものがあれば、何も別に一派を造るの必要は無い、直ちに佛教其ものに歸依すればよいのである、おそらく佛教ほど深遠な、幽玄な、典雅な、豊かな宗教はあるまい、私ども大和民族には、西洋流義の宗教は、到底有かたく信奉することが出来ない、をかしまものである。

切支丹渡來以來、基督教が我國にはいつてから、相當の歳月を経て居るが、どうも佛教の様に傳播しない、其傳播しがたい處に、私ども大和民族には、順熟調和しにくいものがあるのではあるまいか、人種的思想、民族的思想と云ふものは、實に恐ろしいものである、決して輕々に觀過するとは出来ない。

佛教と神道とは、事實において、或る程度迄調和してゐる、然るに、神道と基督教

とは、何處までも調和することが出来ない、私の見る處を以てすれば、其よく調和する事の出来るのも出来ないのも、その主なる理由は、人種的思想、民族的思想の上にあるのだ、故に宗教勢力の強弱を考察するには、到底之を遺れるとは出来ない。

いまや政治的にも、經濟的にも、將また社會的にも、教育的にも、信仰問題が喧しくなつて來た、此時に際つて、宗教問題が筆舌に上るのは、必ずしも怪むに足らぬ、其處で如何はしい——宗教まがひのものに、當局の眼のひかつて來たのも、亦決して謂れないとは無い、思想問題の前途、果して如何。

神前結婚、佛前結婚の次第に盛んに爲つて來たのも、肅正選舉を神、佛の前に誓ふといふ様なとも、何等か由來する處が無くてはならぬ、之に依て、國民中、或る階級に屬するものゝ思想の動きに、漸く調子の變つてきたとを認め得られるものがあるが、すまいか、兎に角、信仰問題は、今後に於ける重大問題の一ツである。

(九)

今度の選舉で、政友が慘敗して、民政が第一位にあがつたのは、政友の信用が地に落ちたのと、其作戦計畫の下手であつたのとに引かへ、民政の信用が昂まつたのと、

其作戦計畫のうまかつたのに由るものである、と見るものも可成り多いやうであるが左様の見方は、政黨過信の錯覺から來た、間違つた見方である。

正確な、徹底した眼光を以てすれば、大多數の國民、即ち選舉人には、政友も無ければ民政も無い、是まで政友派だの、民政派だのと云ふたのは、因縁、情實、買収などから生れて來た、一種の惡習的符調に過ぎないもので、決して其主義、綱領などに對する思惑を基調とした、正しいものでは無い。

又無産黨の進出について、無産階級の覺醒に由るもの、如く、見て居る向きもあるやうであるが、是また餘ほど買ひかぶつた見方である、無産階級に屬するものに、眞に能く覺醒し得るだけの智識を有つて居るものがどれ程あるだらう、換言すれば、無産階級に屬するものに、夫れ程の政治的批判力があるだらうか。

何等具體策には、想ひ到るほどの智識も無く、たゞ最も大ざつばな、平等觀や借金棒引論などに魅せられて、拍手喝采を濫發する様なものに、確かな政治的批判力のあらふ筈が無い、とすれば、無産黨の俄進出を以て、譯も無く、無産階級の覺醒に由る

ものであると云ふのは、輕率、皮相の見も甚はだし。

私共一段の高處に在るものから見ると、今度の選舉に際し、候補者の發表した政見のなかには、政友に屬するもの、民政に屬するもの、乃至無産黨に屬するもの、中立を標榜するものを問はず、だゞ當選せんが爲に、選舉人の喜ぶ様などを發表したに過ぎないものが、決して少なくなかつた様に思はれる。

政治は事實である、無論理想も無ければならぬが、單に理想、寧ろ空想をのみ以てしては、到底其實効を擧げることとは出來ない、要するに、今度の選舉に於ける意想外の結果は、肅正の掛聲に脅かされた大多數選舉人の、一時的氣まぐれから來た、變態的現象に外ならない、勝つたとて歡喜するも愚、敗れたとて泣面するも亦愚。

(十)

政府當局などでは、今度の選舉の結果を見て、或る程度まで、肅正の効果を收め得たかのように思ふてゐるらしいが、夫れは大なる錯覺である、元來肅正と云ふことは——肅正といふ言葉は、どんな意味を有つてゐるだらう、讀んで字の如く、肅ましく正しい作法に出でよと云ふとはあるまいか。

□ 肅ましい正しい作法とは、如何なる意味であるか、良心的動作と云ふとではあるまいか、良心的動作とは、如何なる意味であるか、天地神明に誓ふて、毫も恐るゝと、耻づると、疚しいとの無い行爲と云ふとではあるまいか、換言すれば、清浄なる信念の指導に基く、感謝底の舉措といふとである。

□ 今度の選挙の結果を以て、果して淨信底、感謝底の賜ものであると視ることが出来るだらうか、當時大多数の選挙人は、肅正と云ふとに對し、如何なる氣持であつたらう今日また如何なる氣持で居るだらう、これまで大多数の選挙人は、選挙と云ふとをどんな風に見てゐたらう、投票の價値をどう云ふ風に考へてゐたらう。

□ 因縁、情實、買収等を外にして、投票させられた選挙人が、果してどれ程あつたらう、大多数の選挙人は、投票と云ふとは、決して只ですべきもので無い、と考へてゐたのだ、然るに、政府當局が肅正と云ふとを呼びかけて來た、頼まれても、買はれても嚴罰に處せられるぞ、と大聲疾呼して來たのである。

實は、候補者たるものも、夫れにはちよつと困つた、選挙人の方は、當に困つたばかりではない、殆ど震へあがつた、下手をすれば、直ぐに檢舉だ、拘置だと聞いては手拭一本もらふとも出來ない、況んや纏つた金銭を受けるとに於てをやだ、斯ういふ脅威的作用が、果して能く肅正を精神づけたものと云へやうか。

元來内閣の諸公を始め、政府當局者にしても、寸毫の信仰心すら有つて居ない、さういふ連中が、自己の脚跟を遺却して、顔厚しくも呼びかけて來た肅正、夫れが本當の肅正として、良心的動作、信仰的行爲として、肅ましく正しく現はれて來るものだらうか、内閣の諸公も、政府當局者も、先づ以て自から反省するの要がある。

(十一)

飛報到る、何の飛報ぞ、詳報到らず、其實相を知悉する事が出來ない、忠愛の熱情に燃えて居る國民の思想は、少壯軍人の熱烈なる動作に刺戟されて、方さに昂奮の頂點に達して居る、外に強敵あり、内に不忠不義を敢てして、平然たる政客、財閥等あり少壯軍人の憤怒、必ずしも怪むには足らぬ。

五、一五事件は、已に過去の歴史と化し去つた、相澤中佐に對する軍法裁判は、今

まさに其眞髓に觸れんとして居る、是また方々に其核心に觸れつつある帝人事件、私鐵事件に於ける被告人等の態度は如何、彼此對比し來るにおいて、其感如何、帝人事件、私鐵事件の被告人等には、大和魂は絶無である。

政黨の墮落、腐敗、政黨と財閥との提携、横暴、元老、重臣の通謀、聯結、夫れが國民の思想におよぼす影響は、果して如何、近時俄かに兵農の併全を高調するもの、現はれ來れるは、抑も何に由來するものだらふ、肅正といふ脅威手段底に行はれた總選舉の結果、又果して喜ぶべきであらふか。

學者は、文字を知り、理解をだに豊かにすれば、人は夫れにて完成すと説く、さうして人格價値の何れに在るかを知らぬ、眞の人格は、大乘的人物に於てのみ、之を見ることが出来る、人格は超智識的のものであらねばならぬ、智識をのみ基調とした人格は、低劣な人格である、決して偉大な人格では無い。

臺閣に眞の人格者が居ない、政黨にも、財界にも居ない、乃至教育家にも、宗教家も、眞の人格者かない、大なる指導力を有つた人格者なき國家、社會は、どうしても

動搖する、到底亂脈を免れない、苟しくも國を憂ひ、時を慨するものは、機會を捉へて、奮起せざるを得ない、猛進せざるを得ない。

凝つて百鍊の鐵となり、發しては、萬衆の標となる、是れ我國民性の特長、世界に向つて誇示すべき重點ではあるまいか、我軍人が將に敵手に倒れんとするや、一兵卒の末に至るまで、必ず天皇陛下萬歲、日本帝國萬歲を高唱、莞爾として、毫も悔恨の色なし、飛報到る、何の飛報ぞ、嗚呼何の飛報ぞ。

【十一】

青年將校等蹶起襲撃と云ふ騒動勃發の爲め、帝都は何んとなく物騒の様で、戒嚴令さへ布かれたとのことである、青年將校などが蹶起の目的は、内外重大危急の際、元老、重臣、財閥、軍閥、官僚、政黨等の國體破壊の元兇を艾除し、もつて大義を正し國體を擁護、開顯せんとするに在る、と宣明してゐる。

國體問題は、近來の重大問題である、此一兩年來、貴衆兩院に於ても、可なり喧しい問題に爲つたが、國民の間では、より重大な問題として見られて居る、私は、今回の青年將校等の動作を以て、譯も無く歡迎、推稱するものでは無いが、然かも國體擁

護と云ふとに就ては、斷じて人後に落ちぬ積りである。

□ 若しこゝに建國の精神を蹂躪し、國體を破壊、以て宸襟を惱まし奉るが如き不逞のものがあつたとしたらどうだ、さうして若し當局が夫れに對し、忠愛、報國の熱情に燃ゆる國民をして、満足せしむるだけの措置に出るとが出来なかつたとしたらどうだ、苟くも愛國の志を懷くものは、身命を賭して、奮起するであらふ。

□ 無論非合法的ではいかぬが、合法的の奮起であれば、何人と雖も、之を阻止、彈壓するとは出来ない、近來元老、重臣、財閥、軍閥、官僚、政黨などの態度、言動に就ては、疑念、不満を懷くものが、決して少なく無い、彼等とても靜かに自から省みるに於て、何等か思ひ當るものが無くてはならぬ。

□ 他は且らく措き、牧野伯の如き、金森氏の如き、美濃部博士の如き、何故最う少し早く自決しなかつたらふ、又一木樞相の如き、何故平靜を装ふて、その椅子に頑張つて居るだらふ、事實、大多數の國民は、其ずうずうしさに驚いて居る、さう云ふ態度が、果して至忠至誠、國家を思ふもの、態度であらふか。

□ 私は今さらながら、上御一人の御心中を拜察し奉りて、涙の潜々たるを禁じ得ない帝都——お膝下の東京には、戒嚴令が布かれた、宮城は多數の近衛兵に依て護られて居る、中央および地方は、更に動搖の様子は無い、最も平穩である、とは云ふもの、多數國民の心理状態は、果してどんなものであらふ。

(十三)

□ 帝都に於ける今度の事件は、其由來する處、決して淺近のもので無いらしい、己に戒嚴令は布かれた、陸、海軍の一部は動いて居る、帝都を始め、何れの地方に於ても人心は至て平靜である、動搖の様子は、更に無いとのとであるが、國民の心情に、如何なる刺戟、影響を與へたかは、蓋し問題である。

□ 畏れ多くも御目の前に戒嚴令下の東京を御覽あそばされつゝ、おはします上御一人の御心中は、拜察し奉るに餘りある、我々國民たるものは、餘事はさて置き、上御一人の御心勞に對し奉りては、寸時も恐懼の一念を取り去るとは出来ない、この一點より見るも、今度の事件は、決して小事件では無い。

萬一の場合には、國民たるものは、男女を問はず、老幼を論ぜず、猛然として起つ
の覺悟が無くてはならぬ、斯う云ふ點に就ては、恐らく在郷軍人に於ては、尙さら深
刻な考慮、覺悟を有つて居ると思ふ、又教育に従事せるものなどに在ても、何等か
沈念する處が無くてはなるまいと思ふ。

然るに、最も不用意、不謹慎なるはラヂオ放送局である。事件突發の二十六日早朝
平然として演藝を放送した、其の時私は、荆妻に向つて、放送局の不用意、不謹慎な
る、實に驚くの外ない、某方面よりの飛報に模索し得たる今曉の事件は、國家として
容易ならざる大事件である、演藝放送どころではあるまいと云つた。

果然、其次ぎの放送時間に至つて、當日の演藝放送は、全然中止する旨を發表した
。そんな事は、最う少し放送局の主腦部に智慧があれば、自發的に斷行せられたとで
あらう(以下五十五字削る)

併し、おそまきながら、其放送を中止したのは、聊か嘉すべきものがあるが、昨日
からは、又平常どほり其放送をやつて居る、放送局の主腦部などには上御一人の御心

勞の程がわからないのだらふか、私は、嘗に其不用意、不謹慎の甚だしきに驚くのみ
ならず、之を徹底的に詰責せざるを得ない。

(十四)

少しく内外の情勢の見えてるもの、政治的動きの如何、經濟的動きの如何、思想的
動向の如何に注意、其前途に憂ひを懐けるものは、我國の現狀に就て、決して樂觀は
して居られない、換言すれば、苟くも心ある國民は、我國の現末に對し、相當憂慮し
て居る様である、で、心理的には、決して平穩無事では無い。

政治界に野心を有するもの、乃至たくみに世波の動勢に乗つて、何等かの野心を満
たさんとするものなどは、之を皮相的に觀來つて天下は泰平である、人心は平穩であ
る、と云ふかも知れぬが、苟くも國を憂ふるものから見ると、決して天下は泰平で無
く、人心は平穩で無い、危機は處々に動いて居る。

忠愛の情熱に燃えて、政治、經濟、思想の現狀、乃至將來に、人しれず心を勞して
ゐるものも少なくないが、又赤い頭腦に、當てにもならぬ妄想を漂はせて國家、社會
を攪亂せんとするものも亦決して少なく無い、理智と現實とに囚へられて、夫れ以上

に抜き出るとの出来ないものは、真に可憐である。

我國民の思想は、概して動搖して居る、然るに、政治家中にも、教育家中にも、宗
教家中にも、能く之を導き、能く之を慰め、以て安心立命の境界に遊ばしむるほどの
大人格者が無い、大方の政治家の眼中には、名利以外何ものも無い、名利以上の或る
ものに、心眼の輝いで居るものは、一人も居ない。

教育家は理解豊かにして、快辨俗を魅し得る底のものを製出せんことを理想とし、
宗教家は、己れに堅實な信念なきを遺却、他に向つて、徒らに形式的信仰を強ゆるの
嫌ひ無しとせず、殊に歐、米の文化——科學萬能を禮讚する政治家、學者などに至つて
は、寧ろ危険千萬である。

原敬氏が東京驛頭に刺されて以來、政界の巨頭、財界の有力者にして、兇刃、兇彈
に倒れたものは、決して一二に止まらない、而して時は、大正、昭和の聖代である、
其聖代に汚點を看けしめたものは、抑も何者であるか、政治界、財界、教育會、宗教
界、先達などは、先づ以て自から反省するの要がある。

(十五)

忠君愛國の情熱底、國家の隆昌を、無窮に期待、願望して居るものは、今古を通じ
世界を通じて、恐らく我々大和民族ばかりであらふ、私どもは、何處迄も其信仰底に
於て、眞の舉國一致、強力なる内閣、寧ろ至誠至忠一點張りの、どつしりした鞏固な
内閣の出現を切望して止まない。

此際少しでも色彩のあるものは駄目、内閣組織の資格は無い、官僚的色彩のあるも
のも駄目、財閥的、軍閥的色彩のあるものも、又政黨的色彩のあるものも、斷じて駄目
である、動亂一味の宣言の中に、國家を攪亂するもの、政治を弄ぶものとして、歴々
數え上げてあるのは、抑も如何なる部類に屬するものであるか。

元老、重臣、官僚、財閥、軍閥、政黨などでは無いか、何も私は、動亂一味の言ふ處
を以て、一から十まで正鵠を得たものであるとは思つてゐない、寧ろ其心情に就ては
憐むべきものが無いではないが、その行動は穩かでなかつた、飛んでも無いことを遺
つたものであると、深く惜み、且つ悲み、責むるものである。

併し彼等動乱の一味——其忠君愛國底に燃ゆる熱情の持主は、軍部内にも、又大多數の國民中にも、まだ澤山ありはすまいか、更に之を詳言すれば、是までに於ける元老、財閥、軍閥、政黨などの行爲に對し、不平不満を懐くものが、軍部内、大多數の國民中に、まだ相當にありはすまいか。

卒直に申せば、私ども國民は元老、重臣、官僚、財閥、軍閥、政黨などの對皇室觀念、對國家觀念について、大なる疑念を有つものである、私どもから見ると、現時の我國、我國の前途は決して安穩無事であるとは思はれない、必ずや多事多難である、内外幾多の問題が起つて來るものと信じて居る。

内閣組織の相談に預つてゐる元老、重臣、又其關係の椅子の幾個かを得て、野心を満たさんとする政黨などに、軍部内の熱烈なる忠愛の至情、大多數國民の深憂が、能く受とられ、仔細に會得されてゐるだらうか、眞の舉國一致は、上下一心でなければならぬ、眞の強力内閣は、君民一體の上に組織されたものでなくてはならぬ。

(十六)

忠愛の熱情に燃ゆる多數國民、數百萬の軍人——現役、豫後備、在郷軍人等をして、満足せしむるに足る内閣は、眞の舉國一致内閣、純潔なる強力内閣で無くてはならぬ、苟も色彩を有つ人物には、到底さう云ふ内閣を組織することは出來ない、今日數えあげられてゐる人物中には、之を見出すことが出來ない。

今日數え舉られてゐる人物は、何等か色彩を有てる人物にあらざれば、どつしりした人格を有つてゐない人物ばかりである、此際に於ける内閣の首班者は、どうしても無色彩にして、偉大なる人格のもち主でなければ駄目だ、元老、重臣等の眼中に在る人物は、如何なる人物だらう、國民の心配は、其處に在る。

平沼男、かならずしも面白くない、荒木、宇垣、何れも濃厚な色彩がある、近衛公は如何、清浦伯は如何、此二人者は、前者に比すれば、稍理想に近いものはあるが、果して能く此難局を引受けて、鎮定、打開を爲し得るだけの覺悟、手腕ありや否やが疑問である、其他二三數えあげられる人物は、尙更問題でない。

此際、若し政黨内閣を主張する者があるとするれば、夫れは盲目滅法の妄見、採るに

足らぬ、私ども眞面目な、忠實な國民から見ると、我國現在の政黨は。其何れを問はず、悪色彩濃厚のものばかりで、此難局を托するに足るものは、何處にもないばかりでなく、其存在すら、有害無益のものゝみである。

果然、本篇執筆のさい、飛報が來た、曰く、軍事參議官一同は、今回の事件に對處すべき、陸軍としての態度に就き、重要な意見書を起草、西園寺公に提出する筈である、而して林大將、眞崎大將、阿部大將、荒木大將、西大將、植田大將、寺内大將は、聯袂、現役の辭表を、川島陸相の手許に提出したと。

流石は軍人である、官僚系のものや、政黨者流には、彼等の様な態度は、到底見ることが出来ない、今度の事件の直接責任は、無論陸軍に在るが、然かも時の内閣諸公にも、相當責任のあるのは申すまでもない處だ、聯袂、辭表は提出しても、恐らく夫れ以上、責任を明かにすることは出来まい、氣の毒なほど意氣地がない。

(十七)

果然、近衛公は、組閣の大命を拜辭した、流石に公である、若し更に大命が清浦伯に下らんか、伯も可なりの老齡なれば、畏れ多いとながら、大かた拜辭するだらふ、

と、達觀者流は見て居る様である、とすれば、この際の組閣者は、果して何人であるか、大多數國民の關心は、擧げて其處に在るのだ。

次ぎの國民關心問題は、政黨の對組閣態度である、正式、本筋の立憲政治、即ち憲政の常道が、政黨内閣にのみ依て行はれるものと思ひ込み、又高調しつゝある政黨としては、或はそれを自身の手に依て、組織して見たい、と妄想して居るかも知れぬが、夫れこそ妄想も妄想、大々の妄想である。

私共の見る處を以てすれば、我國の憲政は、建國の精神上から見て、政黨は、夫れほど必要のもので無い、歐、米の立憲國は、其國體に於て、全然我國と異なるものがある、であるから或は政黨と云ふが如きものを利用するにあらざれば、其運用がうまく行かぬかも知れぬ。

換言すれば、歐、米の立憲國に於ては、政黨の力を藉るにあらざれば。大多數國民の意志を綜合、代表せしむることが出来ないかも知れぬが、我國に於ては、そんなものゝ力を頼まなくても、容易に之を表示せしむることが出来る、昨今に於ける國民思想

の動向が、明かに夫れを物がたつて居るでは無いか。

□ 歐、米立憲國のとは、且らく措き、我が國に於ては、今日政黨を敬重し、信頼して居るものは、殆ど無い、寧ろ其不可信低の行爲、黨本位的態度、重積せる罪惡などの着々として暴露し來れるを見て、嫌惡の情を起し、愛憎をつかせるかの觀がある、政黨者流も、少しは感づき得られるものがあらふ。

□ で、私は、下手に閣僚の椅子を狙ふが如き、下劣な根性を棄て、この際潔よく自發的に解黨を斷行、今度の事件に就ての責任を分擔せよと勸告するものである、苟くも、政黨者流にして、良心があれば、何故彼の動亂一味の宣言中に、特に政黨の二字が明記せられてあるかを考えて見るが宜しい。

(十八)

我國もなか／＼面倒に爲つて來た、又次第にやかましく爲つて行く形勢である、廣田内閣も、出來さうではあるが、容易のことで無い様に觀測される、所謂軍部側の意見とは、どんなものであるか、又軍部側の意見と、廣田氏等の意見とが、漸く近づきつゝあるとは、どう云ふ工合を意味するものだらう。

□ 私どもから見ると、我國の思想の流れは、大體二派に分れて居るのである、その一派の流れは、日本的のものであつて、他の一派の流れは、歐米的のものである、而して其二派が、政治上に於ても、經濟上に於ても、また思想上に於ても、常に相争ひ、相闘ひつゝあるとは、何人も疾くに知る處である。

□ 探長補短は、何事に就ても、元より必要のとである、しかし長短を識別する智徳力なきものゝ、盲滅法底に於ける心酔は、何處までも之を打醒、排却すべきである、古今我國の政治家、學者などにして、譯も無く他邦の文化、制度に心髓、我建國の精神我國民性等を無視せんとしたものが、可なりある。

□ 昨今に於ける軍部側中堅人物の意見 否心ある國民の意見は、さう云ふ心酔者——心酔とまでは行かぬとしても、さう云ふ臭味を有つてゐるものをして、政治の要路などに立たしめると云ふとは、どの方面からみても、頗る危険であるから、飽まで排斥すべきである、と云ふ處に在るのであるまいか。

私は軍部側に、小原法相の態度に、國體明徴に就て、不徹底と見るべきものがあつた、に依て氏をして今度の内閣に列せしめるのは、斷じて面白くない、といふやうな口吻のあるのを見て、爾か推斷することが出来るのである、而してさう云ふ意見には大多數の國民も、全然感を同うする處で、是また至當の見方である。

我々國民からするも、苟くも我國體、我國民性等に就て、正しい理解、信念を有つてゐない様な人物をして、此艱難時の政治要路に立たしめると云ふことは、絶対に反對する處であるから、軍部側の要望には、徹頭徹尾賛意を表するに躊躇しない、廣田氏ば其邊の考察、覺悟にして、透徹、不動のものがあるだらうか。

(十九)

私を見る處は、時代柄としてちよつと無理な處があるかも知れぬが、漸く成立した廣田内閣に就ては、最も慊焉たるものがある、夫れは其閣僚を一瞥するに、概して人物が小さいことである、どつしりした人物の無いことである、所謂才智者はあるかも知れない、が、大人物は居ない。

此非常時、別けてもより喧しく爲つて來た我國の現未に於ける内閣、其内閣に列す

る大臣、其大臣に、ほんとうの人格者、大なる人物、どつしりした性格の持主を要するものは、何人も疾くに承知してゐる處であらふ、廣田總理以下十大臣の内、幾人さう云ふ人物が居るのか、私は之を見出すに苦む。

一死報國、そんなとは誰でも云へる、が、云ふだけでは何にもならぬ、眞に一死報國の至誠覺悟があれば、此際輕々しく大臣などにはならぬ、今度の閣僚を見わたすにほんとうに日本精神を默會して居るものは、幾人も無い、別けても政黨出の四大臣に至つては、二東三文、絶対に大臣資格は無い。

若し賢者をして島田、前田、頼母木、川崎たらしめたら、絶対的に其の推薦を辭退したであらふ、動乱一味の宣言中に、政黨も國家害物の一つとして、數へ上げられては無いか、假令數え上げられて居ないとしても、夫れ自身等の過程を一顧し來ることが出来るほどの良心があれば、厚顔しく顔出しは出来ない筈だ。

政黨政派に、何等關係の無い大多數の國民は、動乱一味の宣言に教へられるまでも無く、政黨政派の無誠意、手前勝手、其重積せる罪惡は、百も承知して居る、然るに

政黨夫れ自身——黨人夫れ自身は、厚顔恬然、知らざるもの、如くである、日本精神の默會が何處に在る、武士道の閃めきが何處に在る。

他は且く措き、今度の關係中に、黨人を加へたことは、大多數國民の腑に落ちざるものとして、何處までも不快を禁じ得ないところである、陸軍側の聲明した國體明徴國民生活の安定、外交の刷新、國防の充實、そんな重大な問題に參畫、建策、之を實現させることが出来るだらうか、疑問、疑問、大疑問である。

(二十)

陸軍側の聲明に係る、國體明徴とか、國民生活の安定とか、國防の充實とか云ふが如きことについては、元より何人も異議の無い處であるが、偕て其實行力如何、實現方法如何といふ段に爲ると、却々やかましい問題となる、私は新内閣に對しても、其點について、大なる疑問を有つてゐる。

全體是等の問題を實現させるには、どう云ふ實現方法、又どれほど實行力が必要だらう、廣田首相を始め、新内閣の諸公にして、それを具體的に、又徹底的に宣明したものは、まだ一人もない、先づ國體明徴と云ふとから聞いて見たい、諸公は、國體明

徴と云ふとを、どういふ風に解釋、會得して居るか。

單に建國の精神を明かにし、皇室の尊嚴といふとに就て、はつきりした認識が得られるれば、夫れで十分であると思ふて居るのではあるまいか、若しさう云ふ、淺薄な見方に過ぎないとすれば、眞に愚劣極はまる話で、嘗に共に國體問題を語るに足らないと云ひたいばかりで無く、到底この難問題を解決することは出来ないと言せざるを得ない。

我國の國體問題は、決して言筈の問題では無い、論量的問題では無い、故に眞に其明徴を期するには、政治的、教育的方法だけでは駄目である、法律的、規則的手段だけでなく、矢張り駄目である、然らば如何なる手段、方法に依るべきか、如何なる工夫に依れば、其明徴が期し得られるであらうか。

夫れが問題である、新内閣の諸公中、其點について、徹底した具體的意見を有つて居るものが、果して幾人あるだらう、我國體の眞髓、神妙不可思議である、理解力では、觸着するとは出来ない、認識力でも、また觸着するとは出来ない、超論理底に

於てのみ、始めて觸着する事が出来るのである。

東洋哲學の妙味を味ひ得るとの出来ない様な西洋流儀の政客や、學者や、教育家などには、到底其眞髓に悟入するとは出来ない、東洋的信仰の有がた味に感泣し得ないやうな浮薄者流には、斷じて其眞髓に點頭するとは出来ない、私は、新内閣の諸公中に其合格者が幾人あるかを疑はざるを得ない。

國體明徴と云ふのは、國體を明かにすると同時に、的確に之を立證するとである、併し只夫れを明かにして、立證して見た處で、夫れが國民の思想上に、強力な反響を與ふると同時に、國民をしてその眞髓に觸着せしめ、感悟せしめ、云はれない有がた味を覺えしめるものが無ければ、何の効果もあるまい。

効果と云ふては、聊か語弊なきにあらずであるが、國體明徴の落處、國民をして我國體の有がた味に感泣せしめ、一種の信仰を捧げしむるまでに至らなければ、其目的を達成、其期待に到着したものは云へない、夫れには、第一其提唱者——指導者に人を動かすに足るほどの、崇高な人格が無くてはならぬ。

我神州の稱呼は、抑も何處から來たか、何もの、創唱に係るか、夫れが何處から來たものであらうと、又何もの、創唱に係るものであらふと、今更そんなとを穿鑿するの要はない、兎に角、神州と云ふ、己に不思議では無いか、諸外國の所謂神の國は、何れも天上に存在するもので、夢想的のものでは無いか。

然るに我國に於ては、現前實在の此國土、夫れを直ちに神州と稱呼して居る、ばかりで無く、眞に神の國として、萬古不動の信仰を捧げて居るのである、申すも畏きことながら、我天皇は、神種にまします、我々國民は、其赤子である、故に我々國民は天皇陛下に對し奉りて、國父陛下と申し上げて居る。

我國體の世界に比類なき、多言を費やさずして明かな處である、我天皇の神聖にましますこと、是亦多くを語らざるも、自から點額せられるものがある、玉の御聲に、感泣を禁じ得ないものは、決して高山彦九郎一人では無い、古今去來せる幾多の國民にして、夫れに感泣せざるものは、一人も無い。

新内閣の諸公にして、這裡の消息に徹底して居るものが、果して幾人あるだらふ、所謂國策の樹立、時節柄そんなことは、末の末なるものである、國體信念の上に發顯し來る云爲は、たとひ其方法、手續きに、多少の錯誤が有つても、敢て之を咎むるには足らぬ、又漫りに之を咎むるものもあるまい。

(廿一)

國民生活の安定と云ふとも、之を筆舌にすれば只此數語に過ぎない、併し如何にすれば安定するか、如何にして安定せしむべきかといふに至つては、決して容易の問題では無い、國民生活の安定、之を聽くこと既に二十年、國民の生活は今以て少しも安定しない、愈々窮迫するばかりだ。

殊に大多數の國民——農民を其の主體とする地方民の窮迫は、一年其度を加へつゝある、市部と郡部、即ち都會民と農民との國稅及び地方稅の負擔額を、其所得基準の歩合上に看よ農民の負擔は、比較にならないほど重いのである、然るに、農産物の價格は、反比例的に激落の途を辿りつゝある。

時代の勢趨や、市價の騰落を見て、うまく手加減することの出來ないのは、農業第

一の基本たる耕地そのものである、耕地は風土氣候の關係から、又耕作傳統の關係等から、其農産物の市價などに依て、變更、伸縮の手加減をすると云ふとは、決して容易のもので無い、否、大體に於て、其手加減が出來ないのである。

然るに工業、商業に至つては、通貨資本が其基本と爲つてゐるのであるから、時勢市場の模様等に依て、増減、加除をすることは、實に易々たるものである、然るに其自由の利かぬ農民の負擔が比較的重いと云ふのは、抑どう云ふ譯だらふ、夫れには最も込入つた理由が無くてはならぬ。

是まで種々の理由、口實の下に、國家の保護、援助を恣にしてゐたのは、大なる工業者、大なる商業者では無いか、換言すれば、是まで國家の保護を占斷して居たものは、所謂大資本家では無いか、財閥では無いか、それに引かへて、農民はどうだ、直接間接に搾取されるばかりでは無いか。

動亂一味のものが、國家に害毒を與ふるものとして、歴々數えあげもたのゝ中に、財閥の大書されてゐるのは、單なる反抗的態度の現はれとのみ見ることは出來ない、

これまで財閥のお手先に使はれたものの中には、政黨もあれば、官僚もあつた、ばかりで無く、軍部内にも無かつたとは斷言出来ない。

農村民は、常に重き租税を負担して居るばかりで無く、兵役の義務、國防上の責任も、其の七八割までは、之を負担して居る、日清、日露の戦役に、潔く身命を捧げた兵士の多くは、都會民の子弟であつたか、夫れとも農民の子弟であつたか、滿洲事件、上海事件に、名譽の戦死を上げたのは、どういふものゝ子弟であつたか。

大都市に居住する中流以上のものゝ子弟——別けても財閥などの子弟の中には、口を留學に藉りて、兵役の義務を、海外の遊覽に逃避するものが、相當あるでは無いが、然るに、現に兵役に服しつつある青年にして、遙かに郷里——農村の窮迫状態を見て、又父兄の悲惨状態を顧みて、夜半獨り涙に巾を濕すものが少くない。

我國の耕地面積は、之を其全面積に比較し、其農家戸數に比較するにおいて、甚はだ狹隘である、にも拘はらず、農村の人口は、年一年増増する、愈以て耕地の狹隘を感ずるばかりで無く、教育費の負擔は加はる、兵役の義務は加はるといふ有様だ、我

國農村の前途は、果してどうなるだらふ、考慮に値ひするものが多々ある。

農家五百萬、三千萬農民の負債は、五十億乃至六十億を以て算へられてゐる、而して尙年々増加の傾向である、今や農村民は、四方八方から攻めたてられて居る、其租税の滞納、必ずしも好んで爲すものではあるまい、時に投票を賣つて、一盃のてゞばに、刹那の極樂をゆめみんとするものも、寧ろ大に憐むべきものがありはすまいか。

私は、敢て漫りに大工業者、大商業者——財閥を呪ふものでは無い、然かも目のあたりには、農村民の窮状を見、兵役に服しつつある農村青年の心情を推量するに於て、到底一滴半滴の涙なきを得ない、動乱一味の動作は確かに不合理であつた、飽迄責罰しなければならぬ、が、其心情に至つては、憐むべきものが無いとは云へぬ。

新内閣の諸公は、國民生活の安定といふことに就て、最も心魂 砕いてゐる様であるが、斯くも窮迫せる、斯くも悲惨なる農村民の生活をして、如何なる政策、手段によつて安定せしめんとするか、是まで政府、政黨などの樹立した様な政策、執り來つた様な手段では、斷じて其目的を達成することはできない。

外交の刷新、是また重大な問題である、我國これまでの外交は、恐歐米外交であつた、追隨外交であつた、諂媚外交であつた、聯盟脱退から軍縮脱退に至つて、漸く自主的外交に轉換せんとする兆候を具現し來りたるも、然かも對支、對露方針、政策などを見るに、今尙慊焉たるものが多々ある、憤慨せざるを得ない。

從來我外務省は、歐米崇拜者を以て、其首脳部を占められて居た、殊に在外使臣の中には、其駐在國に阿媚するを以て、唯一無上の外交政策であると錯覺して居たものもあつた、否、今日でもまださう云ふ考えを有つて居るものがあるかも知れぬ、そんな臆病者では、しつかりした外交は、斷じて出來ない。

和光同塵と云ふことは、時處に依りては、最も意義ある作略であるが、然かも漫りに阿媚諂媚を以つて、和光同塵の眞精神を蹂躪、追隨是れ事とするに至つては、寧ろ大滑稽である、否外交上などに於ては、輕々に觀過すべからざる重大錯誤である、時に外交刷新の提唱せらるゝ、必ずしも所以なきにあらずだ。

併しこれまた提唱するだけでは何にもならぬ、一體刷新とは、如何なる意味をことするか、弊害を除き去つて、清新味を豊かにすると云ふことである、果して然らんにほくも其局に當れるものとしては、的確な政策が無くてはならぬ、又敢然として其政策を決行するほどの膽力が無くてはならぬ。

新内閣に、其政策があるだらふか、又其膽力があるだらふか、私をして思ふ存分に言はしむれば、是迄の對太平洋政策や、對支政策などは、ほとんど物に成つて居ない憾みがある、何故最う少してきはきと徹底的に遣つてのけなかつたらふ、露支の我に對する、あの無狀な、あの傲慢な態度を看よ。

在支、在滿の少壯軍人等が、時に憤慨の聲を漏らし、急角度の動作に出でんとするものも、決して無理からぬことである、今度の動亂事件、其參謀部とも云ふべきものは抑も何處に在つたらふ、南大將の全權大使、司今官の辭職は、抑も何を物がたるものだらふ、私は、無造作に其聲明を、其云ふがまゝに受取ることには出來ない。

國防の充實——外交と國防、國際貿易と國防、何れも密接不離の關係を有つて居る

條理ある外交を爲し、利益ある貿易を爲さんとするには、どうしても充實した國防——強力な陸海軍が無くてはならぬ、今の世、國防問題を閑却して、外交、貿易を云々するのは、迂愚の骨頂、一笑にだも値ひしない。

二十年前の世界大戦は、如何なる理由下に勃發したか、最近に於ける伊エ戦争は、何處に其原因があるか、今やまた獨逸のフィンランド占領を發端として、中歐動亂の幕が切つて落されんとして居る、之を我國運發展策の上から見れば、決して對岸の火災として、輕々しく見のがす事の出來ないものがある。

歐米に於ける諸有るいきさつ、果して我外交上、貿易上、國防上に毫も關係なしと云ひ得られやうか、歐洲の動搖、不況は、直ちに米國の動搖、不況を促して來るでは無いか、米國、歐洲の動搖、不況は、即時我國の動搖、不況を呼起して來るでは無いか、寸時も怠るとの出來ないのは、世界大勢の考察、研究である。

我國は、將來世界の如何なる場處に位置すべきか、又位置せざるべからざるか、數十年來世界の地圖は、著しく其色彩を變更して來た、亞細亞地圖今後の色彩は、如何

に變更して來るか、日滿平和の關係にも、前途多少の變革は、到底之を豫想せざるべからず、外蒙の動向、また等閑視すべからざるものがある。

更に日支、日露の國交に就いては、より用心に値ひするものがありはすまいか、若夫れ太平洋問題に至つては、或は空前の大問題化するの虞れ無しとしない、今後若し我國に、干戈を動かすところがありとすれば、其相手は何者だらふ、如何なる強敵だらふ治に居ても、決して亂を忘れてはならぬ。

外交の刷新、國防の充實、果して何れを後にすべきか、見方に依りては、外交政策即ち國防政策である、國防政策即ち外交政策である、陸軍の聲明に係る國體の明徴、國民生活の安定、外交の刷新、國防の充實、新内閣は、如何なる政策、如何なる方法如何なる覺悟を以て、之を實現せんとするか、私は夫れを承はりたい。

(廿三)

此數年來、國縣立學校の卒業式などに於ける文相、知事等の告辭の調子が、餘ほど變つて來た様であるが、殊に本年の告辭は、大變な變り方で、私どもをして耳を傾けしむるに足るものがある、其變り方は、どう云ふ風であるか、特に力瘤を日本主義の

鼓吹、人格主義の強調に入れた處に在る。

□ 日本主義の鼓吹、人格主義の強調、之を私から見ると、寧ろ其おそかりしを遺憾とせざるを得ない、私は、十六七歳の頃から、深く日本主義、人格主義を信奉して居たさう云ふ頭を造つてくれたのは、十四五歳の頃から私を教導してくれた、小學校の先生や、私塾の先生や詩學の先生などである。

□ で、私は、二十四五歳の時、群馬縣の屬を勤めて居た際、縣廳の青年吏員、前橋在住の青年教員、其他志ある青年等と相謀り『日本主義』と題する雑誌を刊行、頻りに日本主義を鼓吹したことがある、當時徳富蘇峯先生は、先生の主宰する『國民の友』誌上で、極力歐化主義を高調して居た。

□ 爾來今日に至る、私の日本主義は、少しも變つて居ない、數年前ちよつと社會民衆黨に加盟したとがあるが、其時も私は、一意皇室中心社會民衆主義を提唱した、私の所見からすると、社會主義かならずしも舶來ものを信奉しなけりやならないものではない私どもは、独自の立場に於て、自己の所信を提唱し得る權利を有つて居る。

□ 處が、同黨員の多くは、一向に民衆の社會民衆主義を信奉、絶えて日本的衆民主義を提唱するの意義あることを知らない、で、私は其ともに天下を論じ、國家の隆昌を計り民衆の幸福を増進することを語るに足らないことを見取つたので、或機會を捉えて斷然脱黨、また元の一切を超越した高處に立かへつたのである。

□ 國家社會主義と云ふのは、早くから西洋にもあるが、私の皇室中心社會主義は、それとも大に趣きを異にするものである、第一古今東西、その主權者を尊稱して、天皇と申しあげてゐる國か、何處に在るか、帝王の稱呼は支那の歴史に於ても、又西洋の歴史においても、之を見ることが出来るが、天皇の尊稱は、絶對に之を見ることが出来ぬ。

□ 私は、本年も例に依て、各種學校、講習所等の卒業式に參列、求めらるゝがまゝに仍て件の如き祝辭を述べたのであるが、愈々其壇上に立たんとする時になると、必ず何等か心頭に問題が持ち上つて来る、夫れは外でも無い、此種の學校の卒業生、此種の講習所の卒業生には、どう云ふと云ふて、祝意を表すべきか、と云ふ問題である。

蠶業學校と蠶業試験場とは、同く養蠶に關するを教へる處ではあるが、其學科の程度に於て、其研究の程度に於て、乃至其組織内容等に於て、高下精粗、複單の差があり、随つて其卒業生の學力、理解力に深淺の違ひのあるのは、云ふまでも無い話である、私は先づ第一にさういふことを考えさせられる。

其處で更に考えさせられるのは、苟くもさう云ふ差違のある卒業生に對し、何程でも將來の参考に爲る様なことを云はんには、私の様な無學、無研究の者としては、却々容易のことで無い、殊に蠶業試験場の女子講習卒業生とか、染織講習所の卒業生とかに對しては、一概に學校の卒業生に對していふ様なことをいふ譯には行かぬ。

祝辭にしても、人を見て法を説くといふことを遺れては、折角の千萬言も、何の役にも立たぬ、であるから卒業生に對して、祝辭を述べるにしても、其相手方に當倣る様な、有意義なことを云はんとするには、必ずしも容易のもので無い、私が何時も、其錯落たる頭腦を惱ますのは其點である。

殊に遠遠の前途を有つ卒業生などに對して云ふことは、飽までも其頭腦にしみ込む様なことで無ければ、實際何にも成らぬ、換言すれば、少なくとも其相手方を感動せしめ、一種其信念となる様なことでなければ、其云ひがひは殆どない、夫れでなければ、寧ろ云はざるに若かずである、其時間の空費が、勿體ないといふことに爲る。

斯ういふ風に考へて來ると、毎年春に於ける各種學校などに於ける卒業式の御案内は、寛山と申す此老人にとりては、確に一種の刺戟劑である、或は一種の若がへり法であるといへるかも知れぬ、とすれば卒業式は、決して彼等卒業生ばかりの卒業式で無く、此耄碌ぢじの試験式であるといふことが出来るかも知れない。

(廿四)

天皇の尊稱、已に夫れが、明かに我國體の特種性を物がたつてゐるのではあるまいか、若し日本主義の根柢が其處に在つて、私ども大和民族の人格が、其日本主義を信奉する處から生れて來るものとすれば、日本主義的教育の大切なことは、今さら贅辯を費さなくても、自から明々白々である。

然るに、文相とか縣知事などは、近頃になつて、漸く其處に氣づいたらしい、こと

に我信州は、教育國王を以て自負してゐる地方であるにも拘はらず、縣知事——縣當局などが、從來さういふ點について、餘りにも無頓着であつたのは、可笑な話してゐると云はんよりは、寧ろ迂濶も甚はだしいと云はざるを得ない。

幸徳秋水事件このかた、我信州から出た赤い人物は、相當にある、別けても教育界から、少なからず赤を出したと云ふことは、教育王國を誇負してゐる我信州として、果して喜ぶべきとであらふか、それとも又悲むべきとであらふか、私から見ると、我信州人の大缺點は、概して信仰心の無いことである。

信仰とは、如何なるとか、正確な自己認識である、換言すれば自敬そのとである、孔子の言葉に『君子は敬せざる無し、身を敬するを大と爲す、身は親の枝なり、敢て敬せざらんや、能く其身を敬する能はざるは是れ其親を傷つくるなり、其親を傷つくるは是れ其本を傷つくるなり、其本を傷つければ枝従つて亡ぶ』と云ふのがある。

自敬とは如何なるとか、自己の尊さを會得することである、自己——人間ほど尊いものは、外には無い、且らく之を其身心の兩方面から看よ、人間ほど偉大な力を與へ

られてゐるものが何處に在るか、人間の研究には、往々にして造化の壘を摩せんとするものがある、之を偉大なる力と云はずして、夫れ將た何をか偉大なる力と云はん。

已に其尊さが會得されるれば、天地に對する信念、即ち天地の鴻恩に對する感謝の心持は、勃然として起つて來ざるを得ない、又己に其心持が起つて來れば、父母の恩、皇恩、社會の恩に對しても、到底大なる有がた味を感ぜざるを得ない、私の重要視する信仰は、斯う云ふ自力的信仰のことである。

文相や縣知事等は、頻りに日本主義、人格主義を口にする、之を口にする、必ずしも非とすべきでは無いが、然かもたゞ口にしたゞけでは、之を其平生底——日々の坐臥行住の上に實現させるとは出來ない、私ども大和民族に在ては、日本主義は、決して餘處ゆきのものでは無い、朝暮行持底のもの、即ち不斷づかひのものである。

其文字を考え出してくれた支那には、忠孝の言葉はあるが、其事實は絶無である、然るに、その文字を輸入して來た我國に於ては、その言葉が勇ましくも麗はしい道德的行作と爲りて現顯、私ども大和民族の特性を價值づけて居る、換言すれば、忠孝の

道、是れ即ち日本主義の骨髓を成すものではあるまいか。

自敬は、孝子の第一義である、孝行は親に對する自敬の發現である、その自敬が、君に對して發現し來る時、たゞちに忠節と爲るのである、忠孝は、決して二道ではない、元是れ自敬の一道である、只その發現形式に依て、忠節と爲り、孝行と爲るのである、で忠孝一如の説、茲に成立する。

であるから、日本主義、日本主義を根柢とする人格主義は、決して論理的のもので無い、何處までも超論理的のものである、換言すれば、信仰的のものであらねばならぬ、また信仰的のものでなければ、敢然生命を賭して、武士道的態度に、身後の英名を留めると云ふ様なことは、斷じてできるもので無い。

信仰即ち躬行實踐である、苟くも信仰の無いものには、實行力は絶無である、とすれば、日本主義、人格主義、之を口舌にしたゞけでは何にもならぬ、論理的に説明したゞけでは、何等の價値もない、是において、その信仰心は、如何にして、如何なる王夫に依て、之を涵養すべきであるかと云ふことが問題となつて來る。

で、私は、文相とか縣知事とかに對し、その信仰心の涵養方法について、如何なる具體案を有てゐるかを聞いて見たい、由來我教育の方針、手段には、信仰心涵養の考慮が、聊かも拂はれてゐない、寧ろ信仰の如何なるものであるかといふことすら眼中に置かれてゐない、實に怪訝に堪へない。

(廿五)

此ほど或る地方新聞に、ほとけ様の御輿のとを、堂々と鳳輦と書いてあつた、鳳輦の二字は時に仙人の乗る車の稱呼に用ゐるともあるが、今日では、大體に於て、天子の御車の稱呼に用ゐるとに爲つて居る、であるから、右の様な場合には、濫りに使用しない方が穩當であらふと思ふ。

近頃新聞記者中には、漢字の用法に就て、無我夢中のもものが相當にある、現に私の社中にも、そんなときには、無頓着のものが、幾人もある、で、私は時折り注意して居る、英語には英語の法則があり、佛語には佛語の法則がある様に、漢字にも其使用法則がある、苟くも漢字を用ゆる以上、斷じて其法則を忘れてはならぬ。

然るに、新聞記者中、さう云ふ點に注意を拂ひ、研究をする様なものは、都鄙を通じて至つて少ない、東京、大阪の大新聞記者ですら、往々にして間違つた用ゐ方をして居るとが、度々目にとまる、例へば、咄・嗟を突・差と書いたり、波・瀾曲折を波・乱曲折と書いたりしてあるのは、殆んどざらと云ふても宜しい。

私どもが斯う云ふことを云ふと、そんな面倒くさいことは、今日の時代——此複雑な時代には、只頭を悩ます材料となるのみで、實際何の役にも立たぬ、第一文章なんでもものは、讀んでわかる様に出来て居れば、それで十分では無いか、と云ふものもあるが、併しそれでは、文章の妙味を味ふことは出来ない。

半化通の學者の中にもいん字平仄なんて云ふ様なことは、古風の詩人のみに通用するとして、何の意義もあるもので無い、故に漢詩を作らんとせば、そんなことには一切構はず、巧みに漢字を並べて、其の言はんと欲する處を、存分に言ひさへすれば、それでいいのである、と大膽にも放言するものがある。

漢字の用法、そんなことはどうでもいゝと云ふ様なものは、概して漢學の素養もな

ければ、漢字の研究もして居ないものである、随つて漢文の極意もわからなければ、漢詩の奥義もわからないものである、さういふやからは、能く穿鑿して見ると、矢張り西洋かぶれをして居る、舶來的日本人に多い様である。

(廿六)

小學教育——普通教育の眼目は、常識を具へた國民を造るに在る、常識を具へた國民と云へば、男子に在ては、一家の家長として立つて行けるだけの人物で無ければならず、女子に在ては、一家の主婦として立つて行けるだけの人物でなければならぬ、然るに、是迄の普通教育は、全然其眼目を外れた結果をもたらして來て居る。

小學教育は、尋常高等を通じて八ヶ年の歳月を要する、稍々豊かな家庭に於ては、尙それで満足せず、更に男子は中學以上の學校へ入れ、女子は高等女學校以上の學校へ入れると云ふ實情である、處がそれほど入念に學校教育を受けさせても、尙家長、主婦として立派に立つて行けるもの、甚はだ少ないのは、どう云ふ譯だらう。

尋常科卒業で、中學、高等女學校へはいつても、優に十ヶ年の歳月を要する、十ヶ年の歳月は、人生五十の五分の一の歳月である、決して短い月日では無い、然るに、

尙それで家長、主婦として立つて行く程の頭腦が出来ないと云ふのは、其教育の方針手段に大なる缺點があるからのことではあるまいか。

教育當局者や教育家等をして云はしむれば、相當の理窟もあるであらうが、兎に角、其の結果から見れば、我國今日の普通教育は、完全に其目的を達成することの出来ないものである、といはなければならぬ、是に於てか漸く教育の改革が叫ばれて来たが、然かも其具體案とでも云ふべきものは、まだ一ツも見ることが出来ない。

我國に於ては、昔から読み、書き、算盤と云ふことを云ふが、如何に開けて来た今日でも、又如何に變化して来た今日でも、國民として最も必要な學力は、矢張り読み書き、算盤の外には無い、然るに今日の普通教育、中等教育は、全く其學力を與へることが出来ない、夫れでは常識を具へた國民を造る教育とは云へない。

然るに、其改革が叫ばれて居ながら、更に具體案がみられない、私はあの花嫁學校といふ様なものを見て、到底一種異様の感に打たれざるを得ない、今後或は花嫁學校といふ様なものが出來はすまいか、と餘計な心づかひさへされる、何は兎まれ、我教育の

方針、手段には、徹底的に大改革を加へなければならぬものが多々ある。

(廿七)

同じ學校の卒業生にしても、中學以上、高女以上を卒業したのもあれば、漸く小學尋常科を卒業したに過ぎないものもある、さうしてその大方のものは、何れも働く道も求めて、世の中に出るのである、又出なければならぬのであるが、彼等少青年にとりては、必ずしも容易のことでない、その心中や察するに餘りある。

世の中の實情は、是まで學校に在て、眺めて居たのとは、大に異なるものがある、寧ろ意外のものが多々ある、大方の學生の人生觀、社會觀は、概して氣樂なものである、中學以上の學校でも卒業すれば、飯を食ふ位の仕事は、何處にでもあるものともふて居るらしいが、今の世の中は、それほどゆとりのある世の中ではない。

此程一人の中學卒業生が、私の社へはいりたいから、入れて呉れまいか、と申込んで来た、で、私が親しく會つて、第一新聞社へはいりたいといふのは、どういふ動機から来たのか、新聞專業といふものを、どういふ風に見て居るのか、と聞いて見ると丸で無我夢中、一言半句も答へることが出来なかつた。

更にまた給料等に望みがあるか、と聞いてみると、はつきり答へることはしなかつたが、其素振から察するに、たらふく飯を食つて、立派な洋服でも着て、反り身に爲つて、瀟歩出来るほどの給料が欲しい、といひたい様な心持らしかつた、其處で私は一ツ二ツ常識的問題について口頭試験をやつて見た。

處が、其答へが物に成つて居ない、否、物に成つて居ないといはんよりは、寧ろ無常識も無常識、實際呆れかへるのほかない、といふ方が當れる様な答辯であつた、其處で私は、懇々と世情、世相の複雑なこと、其年を追ふて窮迫の途を辿りつゝあること等を説き聽かせ、就職の容易ならざることをも引例、説得して返したことである。

中學卒業生、高女卒業生などの多くは、大體に於て、さういふやうな考えを持ち、世の中がそれほどやかましいものであるといふことを知らないのではあるまいか、換言すれば、現前の世情、世相を、ある程度まで、正確に觀察、批判し得る程の常識がないのではあるまいか、とすれば、その世の中に踏み出してからのことが、より多く氣遣はれる。

處が、小學高等科を卒業した數名の女子が、工場製版部に使つてもらひたいと、申込んで來た、で、又私が會つて、どういふ考えで入社したいのか、と聞いて見ると、何れもはつきり、御社で働いてゐる女の方は、どなたも行儀がよく、又能く世の中のとに理解を有つて居るとのことですから、私も是非入れて戴きたいのです、と答へた。

其處で、私は初めの内は、ほんとうの見習ひであるから、手當も至つて少ないが、夫れでも宜しいか、といふと、夫れは十分承知して居りま。から、是非使つて戴きたい、と云ふた、私は之を彼の中學卒業生の態度、答辯などに比べて、ちよつと異様の感に打たれた、又子弟の教育と云ふものは、面倒なものであると考えさせられた。

中學以上、高女以上の學校へ入れる父兄達は、大抵卒業後の就職と云ふことを、第一考慮に加へて、入學させるのであるやうだ、就職、これを廣義に見れば、無論結構なことであるが、狹義、即ち給料と希望と云ふ風に見れば、どう云ふものだらふ、私は大に考ふべきものがありはすまいかと思ふ。

我國近來の教育は、小學教育より中等、高等、大學教育に至る迄、概して給料生活者製出の傾向が多分にある。で、その卒業間際になると、學校に於て、就職口、即ち給料生活口の斡旋に、東奔西走、日もまた足らざる有様である、さう云ふことは之れを大處、高處から見ると於て、果して是認せるべきことであらうか。

□ 教育の大眼目、人生の眞價值などから見て、左様の學校の態度、卒業生の心意氣が果して歓迎すべきことであらうか、又さう云ふ方針、遣口が、果して國運の上に、力ある効果を齎らし來るべきものであらうか、今日相當の學校を卒業したものに、自營的事業に勇ましい活動、生活をして居るものが、幾人あるか。

□ 福澤諭吉先生は、切りに獨立自尊を高調したが、夫れは決して先生の新發明では無い、三千年の昔、釋迦は早く天上天下唯我獨尊を絶叫してゐる、獨立獨歩、自營自活して行く處に、ほんとうの教育の眼目、人生の眞價值がありはすまいか、又國民の國家的活力は、大體そこから生れて來るのではあるまいか。

□ 極端な見方かも知れぬが、私は給料生活は大嫌ひである、給料、活者を目して、他

の袂にすがつて生きて行く者、他力本願者であると云ふて居る、併し世の中の組織は頗る複雑である、國家の機構もまた決して單純なもので無い、であるから、無論さう云ふ人物もなければならぬのであるが、今日の様では、甚は面白くない。

□ 大抵の學校の卒業生が、就職したいと云へば、給料とりになりたいたと云ふことである、であるから各種學校の卒業生にして、給料とり口が見つからないと云ふて、ぶらぶらして居るものが、決して少なく無い、就職の職、その職と云ふ言葉は、單に給料をもらつて働く職業、その職業をのみ意味した言葉では無い。

□ 上は天下を料理する堂々たる政治家の職業から、下は紙屑拾ひの些々やかな職業に至るまで、その職業に大小高下の差こそあれ、職業と云ふには、何等異なつた處はない、又其職業に大小高下の差はあると云ふもの、人間の眞價值は、決して職業そのものゝみに依て定まるものでは無い。

□ 國務大臣となり、其職權を背景として、巧みに賄賂などを取り、上御一人の御信任を裏切る様な政治家よりは、紙屑拾ひの食ふか食はずの生活裡にも、聊か汚れた心を

持たず、風花雪月の自然美に、自からは夫れと氣づかぬながらも、詩的境界に四恩の有がた味を飽喫、歡天喜地して居るものゝ方が、どれ程尊い人間であるか知れぬ。

私は十六歳の七月、初めて兵庫縣の雇員となり、次いで十九歳の五月、警視廳の巡查となり、二十歳の七月、兵庫小學校の授業生となり、廿二歳の八月、群馬縣の准判任御用掛となり、二十三歳の八月同縣の收稅屬となり、二十五歳の六月同縣吾妻郡書記に轉じ、二十六歳の一月同縣利根郡書記に再轉、其歳の暮に辭職した。

夫れからこのかたは、先づ大體に於て、獨立獨歩、自營自活の境界にはいつたのであるが、満足に、有意義に、愉快に生きて行く、この面倒な世の中を渡つて行くといふとは、必ずしも樂なもの無、併し其處にまた獨立獨歩、自營自活の大なる價値があるのではあるまいか、私はさう云ふ信念を有つてゐる。

兎に角、今日は、給料を支拂ふ方の獨立獨歩、自營自活が割合に少なくて、給料とりに爲りたいと云ふものゝ方が比較的多い、故にその給料とりを望む各種學校の卒業生にして、その望みを達するが出来ず、所謂就職の出来ないものが、毎年その六七

割を占めると云ふ有様である、情けない話ではないか。

給料とりの口が無ければ、何故その目的を、獨立獨歩、自營自活の方に轉換せざるか、若し彼等にして、給料とりなんて、他の袂にすがらんとするやうな了簡は、全然之を抛擲、自分の事業の上に、自分で生きて行つて見せん、といふ程の覺悟、勇氣があれば、夫れ程失業々々、と騒ぎ立てる要はあるまいと思ふ。

別けても、私は所謂職業婦人たらしとする女子の態度に、大不満を感じるものである、如何にも世の中は、愈々面倒に爲つて來た、随つて人間の生活も、益々喧ましくなつて來た、で、その生活上の都合もあれば、所謂職業婦人として、一家の生活の幾分を助けて行かなければならぬ、といふ者もあるだらう。

だから、無論一概に女子は、斷じて所謂職業婦人となること勿れ、とは云はれないが然かも出來得べくんば、女子が家庭を餘處に、ある職場に出稼ぎをするといふ様なとは、我國體の精神から見ても、又我國家の成立らから見ても、甚だ面白く無いことである、文部當局などに於ては、大に考えてもらひたい。

□ 家庭外の職業に、其身心を捧げて居る主婦の家庭は、概して索莫たるものである。不始末だらけである、だらしないとおびたしい、又所謂職業婦人の中には、二十歳以上の年輩にして、飯や味噌汁を満足に煮るといふ出来ない様なものが、決して少なく無い、況んや裁縫、洒掃、子女の教養に於てをやである。

私は、毎年各種學校の卒業期に際し、其卒業生の職業問題に對する學校の態度、卒業生の心意氣に就て、首肯し難きものが少くない、卒業生の職業問題は、決して卒業生の生活問題とのみ見るとは出来ない、大觀し來れば、國家問題である——國家の産業問題である、國民の生活問題である、教育の根本問題である、輕々に觀過すべき些事では無い。

(廿八)

私ども日本人は、非常に故郷を戀しが、古今支那人の詩文などには、故郷思慕の情を訴へたものが相當にある、夫れにしても私共日本人の愛郷の情とは、聊か異なるものがある、すまいかと思はれる、其故郷と思ふ心は、取りも直さず祖國を愛する觀念に外ならぬ、で、最も愛國心に富んでゐるのは、私ども日本人であらふ。

□ 私の郷里は土佐である、高知の城下である、今は高知市に編入されてゐるが、其昔萬々といふ村落があつた、其處が私の呱呱の聲を擧げた處である、高知の城、即ち高坂城を距ると僅に小半道、而も私の祖先の様な地位の低い藩士は、大抵城下を取まいてゐる村落に住んでゐた、それは城下が餘り廣くないからであつた。

□ 私は幼少にして故郷を辭した、家祿奉還、其下賜された金を資本に、私の父は酒造業、海運業を始めた、處が所謂士族の商法で、失敗に失敗を重ね、數年間に、家、屋敷、田、畑を擧げて、蕩盡して仕舞ふた、其處で私は父母に伴はれて、神戸に出て來た、丁度それが明治七年の冬、私が十一歳の時であつた。

□ 爾來今日に至る、私は東漂西泊、所謂一處不住である、今年己に七十三歳、故郷の土を踏まざると六十餘年、それで寢ても醒めても、故郷を忘れたことは無い、幼少の時、親んでゐた故郷の山川は、曾て私の腦裡から去つたことが無い、つい此頃のこと私は臆然として故郷に歸つた夢を見た、醒め來つて感慨無量であつた。

其無量の感慨が、忽ち詩情を動かして來た、私は十六七歳の時から詩作を習ふた、が、もと／＼素養が無いから、立派な詩は決して出來ない、それで詩作は何よりも好きである、所謂下手の物好きである、夢中歸郷、構想筆を執つて見た、推敲に推敲を重ねて、漸くのこと出來たのが左の二首である。

衰老無由報國恩、鏡中空剩鬢糸繁、夢馳千里吸江畔、一夜孤帆入浦門、
天涯潦倒已無親、一夜夢馳南海濱、獨有疎梅護堊域、花前泣賦故山春、

(廿九)

將來世界の文化が、飛行機とラヂオと新聞とに依て、愈々意義つけられるであらふと云ふとは、何人も認めて疑はざる處であるが、夫れだけ其事に關係あるものは研究もしなければならず、又注意もしなければならぬ、然るに、ラヂオ放送局——東京中央放送局の如きは、其邊のとは、何等の關心も有つて居ない様だ。

我國のラヂオ聴取者は、之を歐米の或國々に比べるに於て、其數は甚だ少ないのであるが、然かも日に増加の傾向はある、夫れは世の中の趨勢に察して、當然すぎる程當然のとて、苟くも政治、經濟、思想等の動きに心を用ひて居るものは、寸時も無かるべからざる利器であるからだ。

私の所見からすると、ラヂオの或る放送が、國民思想に及ぼす影響は、實際多大のものである、殊に夫れが、家庭乃至少青年男女の頭腦に與ふる刺戟は、何よりも深刻に、且つ強大なものがある、例へばラヂオ體操の如き、兒童劇の如き、演藝もの、如き、其家庭、少青年男女の思想に及ぼす影響はどうだ。

私ども地方に在るもの——田舎に住んで居るもの、心理状態は、東京の様な、賑やかな、上つ調子な空氣の漂ふてゐるところに住んでゐる者の心理状態とは、大に異なるものがある、萬事に派手やかなのは、都會人である、萬事に質朴なのは田舎者である。

處が、近來其田舎者が、ラヂオの淫逸な、浮薄な放送もの、爲めに、知らず知らずうは氣つぽい調子に誘はれつゝある傾向がある、所謂都會人の大方の家庭は、決して堅實な家庭では無い、其心情、動作に至つても、亦決して堅實である、純潔であると云はれ無い、寧ろ其一切がみだらである。

であるから、ラヂオ體操の如きも、其都會人には、無くてならぬものであるかも知れぬが、私どもの様な舍者には、夫ほど必要のものでは無い、私をして遠慮なく云はしむれば、あんなものは成るべく全廢してもらひたい、全廢する事が出来なけりや最う少し手加減してもらひたい。

虚榮的生活に、尖端的氣前を誇つてゐる都會人に在ては、朝な夕な——萬事を抛擲して置いて——ラヂオの前に、夫婦うち揃ふて、體操でもやるのが、非常にいいのである、文化人の態度である、自慢すべき振舞である、と考えて居るかも知れぬが、私どもから見ると、寧ろ氣の毒千萬である。

そんなとをする手足や時間があれば、自分の居間とか書齋とかの掃除でもしたらどうだらふとおもふ、見方によつては、掃除も一種の運動である、女中さんの手だすけにもなる、私は毎朝日の出前に起き、まづ門前の掃除をして、夫れから居間の掃除を手傳ふ、夫れが私の様な老人に取つては、適當な運動である。

夫れから兒童劇とか演藝ものゝことであるが、中には無害有益のものも無いではな

いが、概して有害無益のものである、別けても映畫劇などにいたつては、時折り耳をおふはざるを得ない様なものがある、そんな時には私はたゞちに受信機をとめて仕舞ふ、夫れは孫どもに好い影響は少しも無いと思ふからである。

質實、剛堅な國民思想の涵養鼓吹に、日本主義が強調せられて今日、これを時勢方面から見るといいて、又思想方面、教育方面などから見るといいて、果して必要なものであらふか、有意義のものであらふか、我國民的の信念は、年一年滅亡しつつある我武士道的精神は、日に月に頽廢しつつある、方に大に考ふべき時ではあるまいか。

最う一つ遺憾に思ふのは、放送者の言葉に、間違ひの多いことである、例へば、回復をかいよくといつたり、關東をかんとうと云つたりすることは、ほとんどのべつであるが、核心をかくしんと云ひ、十錢をじゆつせんと云ふにいたつては、漢字の讀方も、日本語の使ひ方もろくつたまにわかかつて居ないのだと申したい。

尤も某博士などは、十錢をじゆつせんと云ふても、敢てわるくはあるまい、と云ふたが、わるくはあるまいの言葉は、二足をふんだ言葉である、日本語としては、

ツせんと言ふ正しいものがある、何にもそんな言葉を寛容して置く必要はあるまい、これ等のことも少青年に及ぼす影響は、決して鮮少のものでない、旁々以て放送局の注意を望まざるを得ない。

(三十)

他地方のとは、且らく措き、縣下の市町村にして、詰らないとて甲乙抗争、市町村民に迷惑を懸けてゐる事實が、必ずしも少なく無いが、少し大觀し來れば、實に下らない話して、萬事行づまれる今日、そんなとに頭を悩ましたり、手間をつぶしたりするのは、如何にも謂れないことである。

而して其抗争の目的か、其市町村を本位とする問題でも在れば、まだしものことであるが、其大方が、抗争者そのもの、私怨、若しくは名利的關係に基因したものであると云ふに至つては、呆れ返らざるを得ない、そんな肛門の小さい人間をいろくの要路に立たせるのは、時節柄大に考ふべきことではあるまいか。

元來公務などを、私怨、若しくは自己の名利的問題などに濫用するのは、大乘的頭

腦の缺如してゐる者の妄作であつて、一段の大處、高處に在るものから見ると、寧ろ氣の毒千萬、憐れむべきものであるが、然かも夫れが獨り市町村の公務に關係あるものゝみに依て演出せられ無い處に、又可笑なものがある。

明かに其市町村を指摘するとは、差控えて置くが、或る處の如きは、先代乃至先々代以來の私怨を根に、些細の事に至るまで、甲乙互ひに抗争してゐる事實がある、而して其抗争者が、其吏員、議員、有力者であるばかりで無く、縣會議員とか代議士とかが加はつて居ると云ふに至つては、聊か恐縮する。

今や天下を擧げて、人格者は至つて少ないが、縣下にも人格者らしい人格者は、絶無と云ふても宜しからふ、其縣會議員や、代議士の候補に立つ時は、やれ非常時がどうの、國民生活がどうの、又農村問題をどうするの、負債問題、公租公課問題をどうするのといふものゝ、偕て其當選後の態度を見ると、概して仍て件の如しだ。

夫れは何故か、要するに本とうの人物か無いと云ふとだ、大きい人格の持主、即ち其市町村の有象無象どもを、其懷にかへ込むほどの局量をつて居るものが無いと

云ふとだ、夫れで公吏とか議員とかになつて見たいとあせる處に、更に又自己の人格的價値を亡失して行くのである、哀れ千萬と申すべきであらふ。

(三十一)

代議士とか縣會議員とか云ふ時節柄重要な地位に在るものは、道徳的に其選舉區の爲めに、何かと心配しなければならぬばかりで無く、政治的に、經濟的に乃至思想的に其區民を指導、誘えきするの責任がある、然るに、其道徳的責任を徹底的に自覺して居るものは、寥寥晨星も管ならない。

代議士とか縣會議員とかにして、眞に國家の爲めに、將た縣民の爲めに身心を捧げて居るものが、果してどれ程あるだらふ、彼等の大方は、只名聞利養の爲めに魂膽するのみであつて、國福、民慶など云ふ様のは、二の次ぎ、三の次ぎにして、殆んど顧みるところも少ない、陋劣も實に甚はだしい。

彼等は、毫も代議士、縣會議員の職責の最も重大なとを知らない、換言すれば、彼等の眼中には、國家も無ければ、縣民も無いのである、であるから彼等の中には、只其の地位を濫用して、ブローカー的の仕事に惡錢を貪り、時流的生活に、費を敲いて得

々たるものも少なくない、寧ろ憐むべき有様である。

夫れと申すも無人格の反映的結論に外ならない、其無人格は、何處から來たか、屢々申すが如く、無信仰から來たのである、而して無信仰は、決して彼等のみに限つたものでは無い、今日の我國は、朝野を擧げて無信仰である、第一皇室に對する信仰が無い、自己の尊嚴、職分に對する信仰が無い。

であるから其口と腹と行ひとは、常に表裏相反して居る、名聞の爲めには、如何なる罪業でも、之を造作するとを辭さない、利益の爲めには、竟に其身を亡ぼすに至ることをも知らない、元來彼等には、確乎たる性根が無い、即ち不動の魂魄が無い、隨つて信仰の價値などは聊かもわかるもので無い。

私をして卒直に云はしむれば、代議士に爲りたいとか、縣會議員に爲りたいとか云ふのが、已に大間違である、さう云ふ地位に据るのは、寧ろ自から望まずして、他から推されて初めて承諾すべきものである、押賣的運動にかち得た代議士、縣會議員果して何程の値打があるか、抱腹絶倒。

度々申すが如く、人格は信仰である、趣味も亦信仰で無くてはならぬ。信仰の光明は、言筈論量を超越した處に在る、人格の價値も矢張り其處にある、趣味の極致も亦復然りである、然るに、世間には、趣味を見るに、所謂道樂、贅澤そのものを以てして居るものが少なく無い、併し夫れは大間違ひだ。

例へば書畫、骨董の趣味であるが、徹底的に書畫、骨董の如何なるものであるかを理解し、會得して居るもので無ければ、其妙諦に接觸、點頭するとは出来ない、書畫、骨董の名人の手に成つたものには、其作品の何處かに、其作家の人格が宿つてゐる夫れが信仰の無いものにはわからない。

趣味は、尊敬の輝きである、尊敬は、理解を前提とした會得即ち超論理底、超研究底の思想状態——信仰——歸命頂禮である、書畫、骨董の筆勢、彩色、形體、手澤などに對する徹底的愛玩は、やがて尊敬の一念を喚起し來る、曰く、言ひ難き風韻、雅致があると、是れ一種の信仰にあらずして何ぞや。

元より趣味にも色々ある、書畫、骨董趣味もあれば、碁、將棋趣味もある、庭園、盆栽趣味もあれば、旅行、探勝趣味もある、時には酒色、遊冶趣味に現を抜かすものもあるか、然かも酒色、遊冶に現を抜かすのは、決して趣味と云ふべきものでは無い、それこそ所謂道樂である、下劣なものである。

古來詩人は、概して酒を禮讚する、有名な詩人季白の如き飲中八仙歌の中に「李白一斗詩百篇、長安市上酒家眠、天子呼來不上船、自言臣是酒中仙」と歌はれてゐるが夫れは其超脱、恬淡な人格に對し、詩賦的敬意を拂ふたもので、所謂道樂者の泥醉的無様に對するのとは、到底同一様に視ることば出来ない。

所謂道樂を以て見られる様な趣味は、無眼識者の上はすべつた見え沙汰に過ぎない而してさう云ふ様なものは、碌でも無い偽物などに簞りながら、掘出し物でもしたかの如く、得々として他に誇示する傾きがある、兎に角、趣味も信仰の處まで行かなければ、ほんとうの趣味と云ふことは出来ない。

此程縣刑事課が發表した、代議士選舉違反の送局數は、百六件の七百卅名に上つて

ゐるが、其内選舉肅正と云ふことに就て、相當の責任ある者、即ち縣會議員、市町村會議員、市町村長、助役、書記、區長、選舉肅正委員等が、六十三名を數へられてゐる、選舉肅正も聞いてあきれると申したい。

其違反は、何處から來たか、政黨關係から來たのもあれば、因縁、情實から來たのもあるが、其主なるものは、矢張り利益關係のものである、今日の人間は、大抵算盤の上に働いて居る、算盤に乗る事なら、其正不正を問はず、敢然として遣つてのけるが算盤に乗らない事は、どんな善事でも容易に遣らない。

堂々たる國務大臣にして、利益の爲めには、上御一人の御信任を裏切つて、平氣の平左である者もある世中であるから、縣會議員や市町村吏員などが、利益を本位に選舉運動をする位のことは、夫れほど驚くには足らぬ、といふ者もあるが、成る程と肯かるゝ節も、多少は無きにしもあらずである。

と申したとて、私は夫れを容認するものではない、世界何れの國に於ても、立憲政治——議會政治は、漸く危機に瀕して來た、英國を看よ、米國を看よ、佛國を看よ、

伊、獨を看よ、選舉の腐敗、議員の墮落は、ほとんど通り相場である、それだけ議員選舉には、肅正を強調すべきものがありはすまいか。

併し、如何に其肅正を強調した處で、今日の實情では、其効果を改めんことは、到底望まざるべきもので無い、肅正選舉は、良心選舉、自力的信仰選舉で無くてはならぬ然るに、其候補者を始め、其運動員から選舉人に至るまでが、悉く政黨關係、因縁、情實、名利に支配されてゐる。

自力的信仰に云爲するもの、良心の命令に言動するものにあらざる限り、肅正選舉の實を擧示することは、到底望まれない、理窟教育、技術教育にのみ依て造作された今日の人間、其人間に向つて、漫に人格的行動を注文するのは、宛も木に縁て魚を求むるが如きもので、之を望むもの、愚や、寧ろ大に笑ふべきものがある。

(三十四)

基督教の教義は、我國の如き國體とは、其根本に於て、全然相容れないものがある基督教の教義上よりすれば、天帝——天に在します神そのものより尊く且偉いものは無いのである、然るに、我國體の上よりすれば、天皇が最も尊く、又最も嚴かにまし

ますのである、天皇以上尊嚴なものは、絶対に無い。

我國にも神様はある、又佛様もある、けれども其神、佛は、基督教の所謂神様とは大に異なるものがある、基督教國に於ては、帝王の位は、天帝から授かるものであるが、我が天皇の位は、天祖以來、萬世一系の皇統に備はつて居るもので、決して基督教の天帝などから授かるべきものではない。

であるから、我國に於ける御踐祚、御即位は、直ちに是れ神わざである、基督教國の夫れの如く、天帝から任命される様な軽々しいものではない、請ふ之を我國の神話に聽け、我國の傳説に聽け、我國の歴史に看よ、又我國の憲法には『天皇は神聖にして侵すべからず』と云ふ明文があるではないか。

且らく之を古今、東西の事實に考察せよ、三千年の長歲月、上に萬世一系の天皇を戴いて、微動だもしない國家が、果して何處に在るか、我國に於ても、時に臣民間の抗爭、戦闘はあつたが、畏れ多くも天皇の御位に指を染めんとするが如き不逞の徒は殆ど無かつた、又あるべき筈が無いのである。

弓削の道鏡、あんなものは問題では無い、正氣の沙汰と見るとは出来ない、狂人の氣まぐれ動作とでも云ふべきものであらふ、觀じ來れば、我天皇ほど尊嚴にましますものは、斷じて何處にも無い、又我國體ほど堅實なものが、世界何れの處に在るか、基督教國の國民などには、到底其有がた味に觸れるとは出来ない。

此頃救世軍内に、稍やかましい議論が持ちあがつて來た様であるが、時節柄傾聽すべきものが無いでもない、我國は、我國独自の立場に於て、我國の救世軍を組織せよといふ主張らしい、萬國本部の支配下に在て、外人のお手先に翻弄されるのは、我國體の上から見て面白くないといふ議論らしい、我基督教界一部の動搖と見てもよからふ。

(三十五)

今日の人間は、經濟を離れて生活はない、物質的生活を離れて、人生は無いと云ふかも知れぬが、一段の大處、高處、即ち超脱、皓潔な立場から之を見ると、そんな解は、可なり下劣な見解である、元來ほんとうの人間の價値、ほんとうの人格の光明は、何處に在るか、私は、眞面目にそれを考えて見たい。

人間は、内満外虚の生活に謳歌すべきか、それとも内虚外満の生活に歡喜すべきか
今人の大方は、内虚外満の生活に歡喜してゐる、而して内虚外満の生活の有がた味な
とは、毛頭わかつてゐない、然らば、内満外虚とは如何なることか、内虚外満とは如
何なることか、今日の我利我利亡者どもには、それも能くわかつて居まい。

内虚外満生活とは、精神的には空虚にして、物質的には充實した生活のことである
、換言すれば、物質的生活には、何等不自由なきも、精神的には、常に不安な生活の
ことである、處で、今人の大方は、物質的生活さへうまく行けば、精神的生活の方は
、餘事の如く見なして、何等考ふる處なく、寧ろ得々たるものがある。

内満外虚の生活とは、精神的生活の安定に、人間の眞價値を認めて、物質的缺乏に
は、寸毫も煩悶せざる生活のことである、而して精神的生活の安定を歡喜するのは、
概して皓潔な人格者の態度である、物質的生活の充實を光榮とするのは、概して下劣
な人格者の態度である、人間の眞價値は、どちらに在るか。

人間の眞價値は、物質に弄ばるゝ處に在るか、それとも精神に生きて行く處に在る
か、或は曰はん、如何に精神的生活に、輝やかしい人生を楽しまんとしても、苟くも
衣食住を支ふる物質に缺乏を告ぐる時は、其願望は、只夫れ一の空想に了らん、精神
生活を先にするよりも、物質生活に魂膽するに如かずと。

併し、私は、何處までも精神論者である、食ふに糧なきも、着るに衣なきも、住む
に家なきも、精神上に不安なきを望むものである、換言すれば、よし衣食住には不自
由を感ずるも、信仰的、趣味的に、満足な生活を願望して止まざるものである、顔回
の一瓢の飲、一たんの食、如何に氣高くも奥ゆかしきとよ。

(三十六)

我信州ほど妾の多い處はあるまい、信州男兒は、妾を有つを以て、一種の誇りとし
て居る、妾を有つとの出來ない様なものは、それだけ働きの無いものである、腕の無い
ものである、男一匹と生れて来て、妾ぐらゐが有てなくてどうする、妾を有つとの出
來ない様な意氣地なしに何が出來るものか、と云ふのが信州男兒の自慢らし。

少し資産が出來るとか、少し地位でも得られるとかすると、直ぐは妾だ、而して大

手をふつて妾宅に通ふ、それがどれほど得意であるか知れない、然かも静かに其の末路を見ると、概して見じめなものである、寧ろ意氣地の無い結論を示さないものは、一人も無い、妾狂ひをする様なものには、さう云ふとが更にわからない。

私の知る範囲に於ては、妾に現を抜かして居る様なものに、高尚な趣味を有つて居るものは、殆んど一人も無い、酒色以外には、何等の趣味をも有ら得ない様なものばかりである、元來酒色なるものは、趣味を以て見るの價値は、更に無い、ほんとうの趣味は、一種の信仰でなくてはならぬ。

一番高尚な趣味は、學問趣味である、修行趣味である、學問修行も、漸く上達するに随つて、自から興味を覺えて来る、其の興味が濃厚に爲ると同時に、趣味となり、信仰と爲つて来る、哲學に深刻な趣味を有てるものは、正に哲學の信仰者である、文學に痛烈な趣味を有てるものは、確かに文學の信仰者である。

修行は、躬行實踐の訓練である、人格一端の表現である、其の修行に趣味を有つ、それが信仰で無くて何んであらふ、例へば詩歌に趣味を有てるものであるが、さう云

ふ人は、詩を作り歌を作り、詩歌を默誦し、朗吟するが、どれほど氣持のいいとであるか知れない、どれほど心安い世界であるか知れない。

妾ぐるひに、下卑た逸樂を貪つて居る様なものには、さう云ふ高尚な趣味は少しもわからない、妾の手に、膝でもつねらるれば、それがどれほど愉快であるか知れない、教育王國を誇る信州勇兒に、左様のもの、比較的多いのは、どう云ふ譯だらふ、理窟の國の弊害的現象の一ツとでも見るべきであらふ。

(三十七)

今日の婦人は、概して無趣味である、夫れ自身は、立派な趣味であると思ふて、無我夢中に爲つて居ることもある様であるが、然かも夫れは趣味と云ふべき程のものでは無く、下劣きはまる、探るに足らない事ばかりである、殊に官吏の奥さまとか教育家の妻女とかに、無趣味きはまるもの、多いのには、驚くの外あるを知らない。

今日の婦人の多くは、只衣服化粧などに浮身をやつすの嫌ひがある、又音樂、映畫などに手間隙を費やし、獨り得々たるものもある、それらのもの或ひは趣味と云へば、云へないともあるまいが、併し果して能く夫れに理解を有ち、其の妙味を默會し

得る程の信念があるかどうかは、蓋し大なる疑問である。

□ 衣服、化粧、別けても音楽、映書などに至つては、其見方、考え方に依つては、決して趣味と云ふべき素質が無いのではない、けれども所謂無我夢中では駄目である、衣服、化粧、夫れは其人の顔かたち、背格好等に依て、それ／＼違はないければならぬ、然るに、今日の婦人は、大抵流行に操縦されて、更に其處までは考えて居ない様である。

□ 音楽、映書に對しても、矢張り其通りで、ほんとうに音楽、映書に理解を有ち、信念を有ちて、夫れを超理的に味はひ得るものは、實際數ふるにも足らない、是また流行的氣分に驅られ見得的所作に餘念のない處から來た結果に外ならないのであつて、其淺薄、大に憐むべきものがある。

□ 私の見を以てすれば、我國の婦人に在ては、家庭的趣味が缺くべからざるものである、家庭的趣味とは、如何なるものであるか、神に對する信仰である、祖先に對する信仰である、臺所、洒掃、裁縫、茶の湯、插花などに對する趣味である、我國婦人

の優美な點は、其處から生れ來るのではあるまいか。

□ 若し更に希望するものが出來れば、私は、讀み、書き、算盤、詩歌などにまで、趣味を有たんことを希望したい、家庭に於ける、婦人のほんとうの趣味は、能くその家庭を平和にし、圓滿にし、氣だかくし、美しくすることが出来る、私は、其處に婦人のやはらかに強き力——妻としては、良妻の力、母としては、賢母の力がありはすまいかと思ふ。

(三十八)

□ 小山邦太郎代議士は、其所藏に係る書畫、骨董、家具などを賣却、其れから得た金を、自分が社長として、深い關係のある製糸會社純水館資金の一部に提供せんとて、各方面の知人、すき者に對し、其賣立てに就て、鄭重な書面を發送した、而して其下入札は、此十五日で、品物の競賣引渡しは、十六、七の兩日である。

□ 邦太郎代議士の家は、小諸に於ける舊家である、私は、嘗に先代久左衛門氏から引續き、御懇意に願つて來たばかりで無く、北信毎日創刊以來可なり御迷惑を懸けて居る、さう云ふ關係があるからのもでもあちふが、私にも一應見に來るやうにとの御書

面である、で、當日は一寸も邪魔して見たいと思ふて居る。

□ 小山家の家業は、商業である傍製糸業に關係して來た、であるから邦太郎代議士も或程度の商業に關する學問、研究をして居るのであるが、其一度推されて代議士に當選するや、自他種々の關係、事情等から、夫れが二度、三度と爲り、到頭今春の當選で、四回目と爲つた、其の人望の程察知せられる。

□ 斯様の次第で、邦太郎代議士は、最早や商人、工業家と云はんよりは、むしろ政治家と云ふ方が適切な人物と爲つた、人には、必ず長所もあれ短所もある、而して多くの人は、概して其短所を數え上げて、其の長所は、之を捨て、顧みないと云ふ傾きがある、聖賢の目には、随分卑しい態度に見えるだらう。

□ 卒直に申せば、邦太郎代議士にも短所はある、併し其人格を概観するに、決して下劣な性格の人物ではない、また先代久左衛門氏も、品のよい人物であつた争はれないもので、其處が、即ち親子である、邦太郎代議士の性格にも、其何處かに父君の面影が窺はれる、其處に四たび當選の因由があるのではあるまいか。

□ 些々たるこの様であるが、今度の藏品賣立ての擧も、其人格閃光の一ツと見るとが出來はすまいか、私どもの様な、書畫、骨董、古物などに執着のあるものから見ると其思ひ切りのよさ加減、無執着さ、恬淡さ、無慾さは、只々敬服の外あるを知らない私は、茲に特に邦太郎代議士の長所をたゞへて、ブローカー式代議士等頂門の一針とする。(昭和十一年四月十三日)

(三十九)

□ 六根清淨と云ふ言葉があるが、六根とは、眼、耳、鼻、舌、身、意の六つを指稱したものである、夫れを清淨にすると云ふのは、生理的乃至、理的に清淨、潔白の一路を辿れと云ふことである、人間の身心作用には、實に不思議なものがある、而して其作用は、身心不二一如底に於て、其神妙さを示現し來るのである。

□ 心を別にして、物の作用が見られるであらふか、物を離れて、心の作用が見られるであらふか心の作用の大方は、物即ち外的刺戟から來るのであるが、然かも物の作用の價値づけられるのは、心の受感力のあるのに由るからのである、で、あるから佛敎では、更に六根を客觀的に見て、色、聲、味、觸、法と云ふて居る。

元來人間に於ける暑い、寒い、痛い、痒いなど云ふ様な感覺は、如何なるもの、作用だらふ、又喜怒哀樂など云ふ感情は、如何なるもの、作用だらふ、何れ心の作用にあらざるものはあるまい、故に若し人間に心なるものが無いとしたら、さう云ふ様な感覺、感情は、絶対に作用しないだらふ、とすれば、其處に大に考ふべきものがあるが、すまいか。

健全な精神は、健全な身體に宿ると云ふのが、今日の通論であるらしいが、私は、唯心論的立場から、其通論とは逆に、健全な身體は、健全な精神から來るものであると斷言する、肺結核は、生理的方面からも、醫藥的方面からも、まだ不治の病氣とせられて居る様であるが、時に夫か精神的療法によつて治癒するとのあるのは、どう云ふわけだらふ。

大悟底の境界に、解脱的坐臥行住をして居る禪僧などに、粗衣、粗食、却つて健康長命のもの、少なく無いのは何故だらふ、私は、其處に私の論據の的確なもの、あるのを認める、又病は、氣を澁ると云ふ俚諺があるが、之も實際的に見來るに於て、

明かに私の論據を裏書きするものである。

人間の快樂、苦痛、或は之を心的方面から見ることとあれば、或は之を身的方面から見ることもあるが、然かも所詮は、其一切が精神作用の外ではない、故に私は、常に人の健康法、長壽術を問ふに對し、健康、長壽、別に法術あるにあらず、只夫れ精神修養の一途あるのみ、と答へて居る。

(四十)

宇宙間一切のものは、これを絶対、双對の二方面から諦視するにおいて、始めて其實相を捉へることが出来る、而して其實相を捉へ得た處に、明かに悟道の一筋が見出されるが、悟道かならずしも冷々淡々のものでは無い、寧ろ其の妙味は、熱血、溫情の油然として溢れる處にあらねばならぬ。

空間、時間は、宇宙の構成要素である、故に宇宙一切のものは、其之あるがために始めて其形相、存在を顯現し來ることが出来るのである、其處で、その空間、時間なるものは、一體何者の造作に係るものだらふ、と考えて見ると、私どもは更に一段の靈妙底に向つて、思索を費やすの要を認めざるを得ない。

□ 空間、時間を超越した處に、一つの神妙不可思議な力がある、其力の實相は、到底之を筆舌にすることは出来ない、只神妙不可思議といふ以外、説明することも、又形容することも出来ない、大方の人は、之を眞理と云ふて居るが、その稱呼、必ずしも妥當では無い、眞理の眞の字は、僞の字の反對文字ではないか。

□ 眞理と云ふからには、僞理がなくてはならぬ道理だ、然かも僞理は、決して理ではない、非理である、理の字を使用すべき筋合のものではない、であるから私は、眞理とは云はない、神妙不可思議な力と云ふ、已に其力は、名稱すべからざるほど神妙不可思議のものである、神妙不可思議と呼ぶの外、呼びやうがないではないか。

□ その神妙不可思議な力の實相、之を捕捉するには、どうしたらよからふ、問題は、即ち其處であるが、古人がいふ通り、向上の一路をたどるの外、斷じて好工夫はない、己に然り、その絶頂は何處に在るだらふ、一切皆空の處に在る、諸行無常、諸法無我、寂滅爲樂のところにある、大分やかましく爲つて來た。

□ 向上の一路の絶頂は、即ち絶對界である、絶對界には、神妙不可思議な力、其一實の存在しかない、所謂一切皆空である、如何なるもの、形も影もない、斯う云つて仕舞へば、誠に無造作な様であるが、偕て其處に、一種の信念を養ひ來らざる、限りほんとうに之を會得せんことは、容易のもので無い。

□ 絶對界には、何等の形影も無い、故に苟くも其處にまで辿りつけば、正に解脱の境界に彷徨することが出来る、一切の繫縛を離脱することが出来る、寒巖枯木の姿と爲り了るのである、第一人間とは何だ、禽獸虫魚とは何だ、山川草木とは何だ、眼に見るもの、鼻にかぐもの、舌に味はふもの、そんなものがあるものか。

□ 斯う云はざるを得なく爲つて來る、其通りである、併し何時までも、其處に踏み止まつて居るのが、果して大悟であるか、徹底であるかと云ふことが、又問題と爲つて來る、其處で更に向下の一路を辿らざるを得なく爲つて來る、向下の一路とは如何なる道程であるか、双對界に通ずる一筋の下り路である。

□ 人間が寒巖枯木の冷淡なものに爲り了つては、人間の價値はなくなつて仕舞ふ、人

間は、絶對的存在ではない、確かに双對的存在である、故に生れると云ふこともあれば、死ぬると云ふこともある、長壽者もあれば、夭折者もある、歌ふこともあれば、哭くこともある、喜ぶこともあれば、憂ふこともある。

苦もあれば、樂もある、苦樂相半ばする處に、人生の興味があるのではあるまいか若し人生から喜怒哀樂を除却すれば、嘗に人生が、無味乾燥のものと爲り了るのみならず、面白味と云ふものは、絶無と爲るのである、元來人間は、何を目的にして居るだらふ、名譽か、夫れとも利益か。

名譽を唯一の目的として居るものもあらふ、利益を無二の目的として居るものもあらふ、又夫れ以上のもの、即ち人格的活躍を終生の目的として居るものもあらふ、之を要するに、何れ其欲望に出發して居ないものはない、換言すれば、欲望即ち目的である、而して欲望には必ず苦悶が伴ふのである。

人生は、其苦悶と闘ふ處に意義づけられて来る、欲望のないものには、苦悶はない苦悶のないものは自墮落者である、自墮落者は自己放棄である、人格蔑如である、さ

ういふものには向上の一路も無ければ、向下の一路も無い、随つて犬猫的行往坐臥に、神妙不思議な力の鴻恩を無視、毫も省顧し得ざる意氣地なしである。

名譽、利益などに囚へられるものには、向上の一路は辿れない、然かも向上の一路を辿つて、一たび神妙不思議な力の靈氣に觸れたものは、又容易に向下の一路をも辿り得るのである、絶對界の消息を思索し得ざるものには、双對界の活殺力は、絶對に無い、古今聖哲の偉績が明かに之を物がたつて居る。

我々人間の祖先——宇宙間一切のもの、父母の父母の父母は何ものであるか、申すまでも無く、神妙不思議な力である、故に宇宙一切のものを、絶對方面から見れば、神妙不思議な力以外、何ものも存在しない、然かも之を双對方面から見れば有象無象、幾多の幻影が其瞳子に映じて来る。

神妙不可思議な力に對する信仰眼を以て、双對界を一瞥する處に、寒巖枯木に暖氣を附與、歌哭喜憂、喜怒哀樂の感動を意義づけて来る、が、其感動が名譽的、利益的の欲望に示現して来るか、人格的欲望に示現して来るかと云ふ處に、悟れるか、迷へ

るかの差點が生れて來るのである、實に面白い。

最う少し判り易く云へば、悟道は、冷靜な會得のまぶたを濡す、温い涙の中に在る佛家の言葉を藉りて云へば、ほんとうの悟道は、煩惱即菩提、即身成佛の處に在る、更に之を約言すれば、向上の一路は、向下の一路の前提である、向下の一路は向上の一路の第一着歩でなければならぬ。

故に悟道は、大乘的言動に外ならぬ、人格的言爲に外ならぬ、換言すれば、人格的信念は、大乘的悟道の結晶である、而して大乘的達人の眼中には、所謂名譽とか、利益とか云ふ様なものは微塵もない、上に向つては道を求め、下に向つては、人を救ふ、それが大乘的達人の眞面目である。

時に政治を論ずるも可なり、時に經濟を議するも可なり、時に花に吟じ、月に嘯くも亦妨げず、要は只人格的信念の上に、それ自身を價值づけると、此人生を意義づけるとに依て、自利利他の大乗的結果を收穫するに在る、今や名に奔り、利に馳するもの、其數を知らず、武士道爲めに將に滅びんとす、慨歎の餘り、本篇を草す。

(四十一)

赤の出現から、俄かに國體問題が喧しく爲り、最近は、頻りに國體明徴が強調されて來た、此程も申したる如く、國體明徴と云ふことは、誠に云ひ易くして、其實現は必ずしも容易のことでない、元來國體明徴といふことは、重大な思想問題である、思想問題中でも、最もやかましい信仰問題に屬する。

であるから、多くの國民をして、我國體の特種性、有がた味を合點せしめるには、まつ以て對國體信念を有たしめるの要がある、それには、如何なる方針を執るべきか如何なる手段に出づるべきかと云ふことが、又直ちに問題となつて來る、國體明徴を口にするものにして、其具體策を有つてゐるものがあるだらうか。

國民に對して、我國體の如何なるものであるかを説明したゞけでは、決して其効果を收めることは出來ない、國體明徴、其明徴といふのは、我國體を明かにし、證據だてることであるが、只夫れを明かにし、證據だてたゞけでは、到底我國體の神髓に觸れることは出來ない。

我國體の眞髓は、絶論量言筈底に在る、所謂學問的研究とか、歴史的研究とかにのみ依て、それに觸れ、其有がた味を合點することは、斷じて出来るものでない、是に於てか、私は、信念の喚起が最も肝要であると主張する、己に然り、其喚起の方法如何それが又大問題である。

無論學問的研究も必要である、歴史的研究も必要である、が更に夫れ以上の超理論的工夫に依て、對國體信念を喚起するといふことを遺れてはならぬ、其工夫如何、曰く、儒佛二道の研究、即ち是れである、元より儒道、佛道は、外來のものである、わが國に於て生れたものではない、けれども夫れを餘處にする譯には行かぬ。

申すまでもなく、儒道は支那で生れたものである、佛道は印度で生れたものであるところが、夫れが一たび我國に渡來するや、我國の學者、信者は、巧みに之を消化し去つて、到頭我國のものにして仕舞ふた、即ち儒道、佛道は、我國に渡來して、一段と活を入れられたのである、一層意義づけられたのである。

或學者は、佛道は、立派な宗教であるが、儒道は、宗教では無い、徳教である、宗

教には、寺院、會堂といふ様なものもあれば、法要、儀式といふ様なものもある、然るに儒道には、夫れが無い、故に宗教と云ふことは出来ない、と論斷して居る、が、私は儒道も一種の宗教と見るとが出来やうと思ふ。

宗教は、信仰に依て成立するものである、寺院、會堂とか、法要、儀式とか云ふものは、其成立に就ての一手段にしか過ぎない、併し既成宗教としては、無論寺院も會堂も必要であれば、法要、儀式も無くてならぬものであるが、苟くも宗教成立の根本的要素か、信仰にある以上、儒道を以て、宗教で無いと論斷するのは、聊か妥當を缺くものがあらふ。

申すまでも無く、佛道は、超論理的のもの、即ち信仰目的のものであるが、儒道も亦超論理的の處、即ち信仰の上に意義づけられるものである、佛道の大眼目は、生死解脱に在る、儒道の根本的據りどころは、天に在る、而して其功德を頂禮する處に、仁義道德の光明を認めて來るのである。

人事を盡して天命を待つ、といふが如き、正に是れ宗教の言ひぐさでは無いが、殊

に王陽明の「學は暗室を欺かざるに始まる」と云ふ言葉などは、佛家の言ぐさと、全然符節を合するものがある、而して其學者には、古來理の一元を信ずるものと、理氣の二元を信ずるものとの二派がある様だ。

佛道の如が、物、心の二方面に開展すると説くのと、儒道の天が、理、氣の二方面に作用すると説くのは、是れまた到頭一致する處がある、從來儒者にして、眞向から佛道を排撃したのもあるか、又佛家にして、頻りに儒道を非難したのもある、併し夫れは、必ずしも正鵠を得た態度ではない。

以上は、最も概括的の批判であるが、兎に角、儒、佛いづれも、其終局目的が、信仰に在るのは、明々白々のことで、今更疑念をひ餘地は、寸毫も無い、しかして儒道は、仁義道德を説き、佛道は、生死解脱を説き、何れも人を斥惡、修徳の方向に引導せんとするに在る、其根本に於て、何處に異なるものがあるか。

儒、佛の二道が、一たび我國に渡來するや、國民は、上下を擧げて、之れに歸依し學修、信仰、且つ巧みに其精神、教義を消化、融通し來つて、我國國民性、我國體の涵

養、琢磨に幾多の資料を採擇し得たのである、であればこそ、なほ半平として抜くべからざる強大な力と爲つて潜在して居るのである。

若し今日我國から、儒道の精神と、佛道の信仰とを除き去つたらどうなるだらふ、又我國佛道の信者、儒道の學者にして、我國體に對し、異存を懷いて居るものがあるだらふか、所謂赤い思想は、何處から來たものたらふ、私は、西洋流義の科學、宗教に囚へられてるもの、態度に疑ひなきを得ない。

然るに、今日教育、宗教にたづさはつて居るもの、別けても少青年の教育に従事して居るものにして、儒、佛二道の研究に力を入れて居るものが、果してどれ程あるだらふ、私が見る處を以てすれば、小學教育、中學教育、高女教育などに従事し居るものは、特に其研究に方を致すの要がありはすまいかと思ふ。

國體明徴と云ふとは、決して一朝一夕にして期待し得べきもので無い、少青年時代から、教育の力に待たざる限り、到底之を望むことは出来ない、とすれば、先づ其教育に従事するものに向つて、其根本的頭腦の涵養——儒、佛二道の研究に出精せんと

を望まざるを得ない、是れ私の久しい間の持論である。

兎に角、國體明徴と云ふことは、所謂明徴の境界に到着したただけでは何にも爲らない、我國體に對し、確乎不拔の信仰の出来ない限り、我國體の神髓に觸れるとは出来ない、我國體の尊嚴、有がた味に感泣するとは出来ない、今日世界各國の實、情形相はどうであるか、世界各國民の生活の有様はどうであるか。

最早や多言を費やすの要はあるまい、英、米の惱みの根源は、何處に在るか、露、支の内紛の原因は、何處に在るか、中歐紛争の因由は、何處に在るか、斯う考察し來ると同時に、翻つて我國の過、現の實情に就て、一顧し看よ、其大に世界各國と異なるものあるに、感激、頂禮せざるを得ないであらふ。

(四十二)

近頃盛んに生活改善と云ふのが叫ばれて來た、而して其の提唱の要點は、第一節約に在る様だが、私の所見からすると、節約などを第一義とする生活改善は、所謂消極的生活改善であるから、時節柄大した効能はあるまいと思ふ、殊に我信州の農村などに在ては、あくまで積極的方策でなければ、其効果の見るべきものは、斷じて無し。

と申したとて、私は、強ち消極主義——節約主義を排斥するものではない、節約すべきものは、何處までも節約しなければならぬが、然かも只節約のみを以て、完全に生活改善の効果を收めやうとするのは、大なる誤りである、ばかりで無く、時節柄そんなとては、到底其目的を達する事が出来ない。

而して生活の根據は、家庭に在るのであるから、其改善にはどうしても家庭を預る婦人が、其第一線に立ち、衣食住の時から、祝儀、不祝儀のとに至るまで、無駄などをしない様に、注意に注意をしなければならぬと云ふのが、殆んど今日の通論と爲つて居るらしいが、其婦人第一線主義には、私も賛意を表するに躊躇しない。

夫れにしても、消極主義——節約主義だけで、其効果を收めんとするのは、大なる間違ひである、で、私は、何處までも積極主義、即ち勤勞主義を強調したい、全體近頃の人は、男女を問はず、概して勤勞と云ふとを厭ふの嫌ひがある、私の信仰からすると、それほど大なる罪惡は無い。

我信州の農村などに在ては、節約にのみ依て、其生活を改善しやうとしても、今日の實情からすれば、斷じて駄目である、一戸平均二千圓の借金を有つて居る我信州の農村、一年一戸平均五六十圓の公租、公課を負擔して居る我信州の農村、それが些々なる節約にのみ依て、果して能く救はれるであらうか、蓋し問題である。

生活改善と云ふことに、幾多の手段、方法のあるのは、云ふまでも無い話であるが、先づ以て今日の窮狀を救ふと云ふことが、其第一歩で無くてはならぬ、實際それでなければ、生活の改善は、到底望まざるべきもので無い、一口に生活改善と云ふても其實行には、自から順序がある、苟くも夫れを遺れてはならぬ。

(四十三)

信州は、山水秀靈の地である、信州に生れて、信州に育つたものには、それほどに見えもしなければ、思はれもしないだらうが、私どもの様な、他地方のもの、別けても土佐の様な、海濱産のものが、初めて信州にはいつて來た時は、大抵其山水の雄大、幽邃なのに驚く、實際信州は、天下有數の仙境である。

殊に其到る處に温泉、鑛泉の湧出してゐるとや、廣漠たる高原の連つてるとや、古

蹟、名勝、少なからぬなどは、確かに天下に誇るに足るものがある、夫れに大體が高原に屬する地勢であるから、その風物のすべてが、他の平坦地方に比し、大に異なるものがある、其處にまた信州風光の特長、認められる。

信州の氣候は、概して順調である、併し寒冷の季間が、溫暖の季間に比して、頗る長い、梅の咲くのが三月中旬、櫻が四月下旬で、李、桃などと一時に競ひ咲くといふ有様、眞に「梅櫻桃李一時開」の春景色を展開して來るのである、で、自然秋の來るのも早ければ、冬の來るのも早いと云ふことに爲つて來る。

其處で問題に爲つて來るのは、信州の風光は、何時が一番いゝか、春がいゝか、夏がいゝか、夫れとも秋がいゝか、冬がいゝかと云ふことである、入湯、避暑、スキー、スケートなどに出かけて來るものには、無論夫々の季節があるが、登山目的、遊覽目的のものには、季節と云ふ様なことは殆んどない、四時いつでも、氣の向いた時にやつて來る。

而して風光に憧れて來るのは、大體遊覽者であつて、スキー、スケートなどに出か

けて来る青年學生等には、しんみり風光を味はふて見たいと云ふ様なものは、十中一二もあるまい、又入湯目的、避暑目的のものにしても、さらに又登山目的、遊覽目的のものにしても、その山色水光に雅懷を養はんとするものは、實に寥々たるものである。

若し此秀靈な信州の山水に口かあつたら、必ず、やれ入湯だ、やれスキー、スケートだ、登山、遊覽だと騒いでくれている、真に我風光を味はつてくれるもの、超視聽的幽趣を詩化してくれる程のもの、至つて少ないのは、實に遺憾であるところぼすことであらふ、俗了も亦甚はだしいしでは無いか。

(四十四)

若し私に向つて、信州の風光は何時が一番いいか、春がいいか、夏がいいか、夫れともまた秋がいいか、冬がいいか、と問ふものがあれば、私は、即坐に、春、夏よりも秋、冬の方がいい、と答ふるに躊躇しない、私の詩眼を以てすれば、信州の秋から冬にかけての風光は、何處に於ても、決して見るとが出来ない。

信州の山水は、實に雄大である、高原、寒國ほどあつて、其山容水態が峻險、幽邃

である、夫れだけまた其風光が、春、夏よりは、秋、冬の方に味ふべきもの、詩趣、畫味がある、一茶の句に「信濃では月に佛にちらが蕎麥」といふのがある、元より佛には、季節は無いが、月も蕎麥も秋のものでは無いか。

暖い季節、暑い季節の風光は、どうしても暖な地方の方がいい、東京の春、夏よりは、京都、大阪、乃至四國、九州の春、夏の方に、大に風光の賞すべきものがある、其の代り、四國、九州では、信州の様な秋、冬の風光は、到底見ることが出来ない、又京都、大阪などの秋、冬も、信州の秋、冬には、無論遠く及ばない。

關西方面の春、夏を知つて居る私どもから見ると、信州の春、夏は甚はだ貧弱である、平凡である、見るべきものが至つて少ない、然るに、其秋、冬は頗る詩趣、畫味に富んで居る、關西方面などの、秋冬とは雲泥の差がある、一例を挙げんに、信州の様な雪景色が、信州以外、何處で見られるか。

信州の黄葉、紅葉、一齊に色づけられて来る、而して實に見事である、夫れは木葉の少しも落ちない内——樹木のまだ鬱蒼と茂つて居る内に、忽然として激しい降霜の

あるが爲めである、別けても柿の紅葉に至つては、斷じて他地方では、見ることが出来ない、書もまた及ばざる趣きがある。

信州の秋から冬にかけての風光、溪頭の紅葉は眞盛りであるのに、天邊に聳ゆる山の頂きには、雪皚々といふ様な風光は、信州を限つての特種な風光である、曾て拙詩がある『地屬高原望壯哉、峯巒重疊水縈廻、溪頭紅葉天邊雪、照映詩人眉宇來』といふのである、如何にも雄大な風光では無いか。

(四十五)

立派な夫のある身でありながら、曾に淫奔に其身を持ちくづしたばかりで無く、爲に聞くも恐ろしい殺人罪に連座し、幾人かの男の生命を奪ふたと云ふ様な、毒婦とも云ふべき女に對し、同情を寄せるとか、結婚を申込むとかするが如きものが、今の世の中には、少なく無いとのことであるが、靜かに考えて見ると實に變な話である。

淫奔な女、爲めにまた大罪を犯すやうな女、そんな女を見るに、慈眼を以てすれば全く可愛相なものである、何とか救はれるものなら、救ふてやりたいと云ふのが、情あるもの、念願であらねばならぬ、然かも能く其本人の性格、經歷、心意氣等を吟味

してみなければ、さう安々と救はれるものではない。

佛家の言葉にもある通り、縁なき衆生は度し難しで、如何に救ふてやらふとしても其救ひの手を拂ひのけて行きたい處に行き、仕たいことをするといふ様なものは、とても満足に救はれるものでない、殊に女の多情、多淫、放逸なものに至つては、實際手の付け様が無い、即ちさういふものが、所謂縁なき衆生だ。

然らば、手の付けられぬ縁なき衆生、さう云ふものには、結局どう云ふ手段を以て臨んだらいいか、私の考えからすると、左手の經卷に依らずして、右手の利劍を揮ふの外、巧方法は、絶対に無い、私の信奉する佛教には、五戒、十戒、二百五十戒、五百戒と云ふ風に、如何にも能く戒律が周到して居る。

而してその戒律の第一は何であるかと云ふに、殺生戒である、併し夫れを大乘的立場から見ると、時と場合、事情と成行などに依ては、小さい虫を殺して、大きい虫を助けると云ふ殺活手段に出ることも、亦たしかに堂々たる佛行の一ツである、としたならば、救はんとしても救ひ得られない様な淫婦等には、重刑主義を以て臨むの外な

而してその重刑といふのは、決して法律的重刑をのみ限つたことでは無い、寧ろ社會的制裁上にその重點を置いたものである、然るに、好奇的にも左様の女に向つて、結婚を申込みのさへあるといふに至つては、世の中の變調子、思想の狂乱も、實に甚はだしといはざるを得ない、教育家、宗教家などは、より眞面目に考究してもらひたう。

(四十六)

近頃、時々若い教育者の間に、戀愛關係が出来、墮落ち、心中など、却々意氣な話
が、新聞紙上に現はれて来る様であるが、夫れか教育者同志であるといふ處から、當局に於ても特に重視し、世間に於ても亦問題視して居る、若いものには有りがちなこと、とはいふものゝ、教育者同志の艶事なれば、輕々に觀過する譯には行かない。

東京市の教育局では、種々研究の結果、一の小學校教員風紀取締案を得たので、早速各小學校長に對し、通牒する處があつたが、夫れは十項目から成るもので、登校、下校の際男女教員の同行を禁ずるとか、其個人的交際、一緒に宿泊、旅行することを

禁ずるとかいふ様なことまで、れいゝしく列記されてある。

小學校教員の風紀だけでは無い、男女の間の行儀、作法は、上下を擧げて、段々に乱れて來た、而して有夫の婦人にして、濫りに淫樂に耽り、得々として毫も恥づることを知らないといふ様なものが、決して少なく無い、中には四十、五十のお婆阿さんにして、若い燕に現を抜かし、内を外に淫樂に其日を送つて居るものもある。

又智識階級の内助や、相當地位あるもの、妻女にして、所謂愛人を蓄へてゐるものも、却々に多いとのことである、若い男女、別けても無學、無智、無地位の若い男女が、時に手に手を把て、逃避行を企てたり、劇藥心中を演じたりしたとて、何にも夫れほど驚くには足らぬ、といへばいへないこともない。

全體斯ういふみだらなことは、何處から來たものだらふ、取わけ教育者間における風紀の紊乱に至つては、其影響する處が、必ずしも輕少のもので無いから、其監督の任に當れるものは、注意の上にも注意し、嚴重に取締るべきが何よりも肝要のとであるが、然かも其注意、嚴督けだて、果して能く其効果を收め得べきや否やは、要し疑

問である。

□ どうやら「男女七歳にして席を同うせず」といふ古い訓戒が、再びものをいふ世の中と爲つて來た様だ、而して夫れが、第一教育者の上にもいはんとする世相であるのは、如何にも歎はしい次第であるか、如何に取締を嚴重にした處で、其由來する處を徹底的に究め、其原因を根こそぎ芟除せざる限り、風紀の矯正は、到底期待するこゝとは出來ない。

(四十七)

□ 内務當局などは、頻りに吏道振肅を叫んで居る様であるが、吏道は夫れほど弛緩して居るだらうか、墮落して居るだらうか、若し其振肅を叫ばなければならぬほど吏道が弛緩、墮落して居るとすれば、其監督の任に在る上長官の責任は、重且つ大、斷じて輕々に觀過するとは出來ない。

□ 元來振肅を要する吏道の限界は、何處に在るだらう、國務大臣以下、市町村役場の雇員等に至るまでを網羅したものであらうか、夫れとも政務官を除いた夫れ以下の官公吏全體のものゝとであらうか、内務當局などの云ふ處を揣摩するに、どうやら政務

官は、其中に包含して居ない様である。

□ 何れにせよ、今日俄かに吏道振肅なんてとが叫ばれるのは、我々國民としては、何となく不快、不安を感ぜざるを得ない、昨今官、公吏ばかりで無く、教育家や宗教家などの中にも、收賄、詐欺、横領等の不信行爲を敢てして、恬然恥づることを知らないものが、彼方此方に可なりある様であるか、甚はだ面白くないとだ。

□ 教育家などの不信行爲は、元より大に責めなければならぬが、國務大臣とか、貴衆兩院議員とかの犯罪行爲等に對しては、果して如何なる措置に出づべきであらうか、東洋、殊に我國古來の習俗は、下のものは屹度上に立つものゝ言動を見習ふと云ふ風に爲つて居る、であるから苟くも上に立つものは、其積りで遣つてくれなくてはならぬ。

□ 然るに昨今の有様は、殆んど夫れと反對である、近くは之を私鐵問題に看よ、帝人問題に看よ、而して其國民の思想に及ぼす影響は、微々たる教育家や宗教家などの不信行爲から來る夫れとは、到底同一視すべからざるものがある、にも拘はず法律は

單に其犯罪行爲の如何のみに依て、斟酌、制裁を加へるだけである。

又場合に依りては、其從來の地位、名譽等を考慮に入れて、特に寛大な處置に出ると云ふ様なこともあるが、さう云ふ裁判官の態度に就ては、大多數の國民は、何時も不滿の感を懷くのである、であるから上に立つものゝ犯罪行爲などに對し、濫りに寛大な處置に出ると云ふとは、益々國民をして、不平を懷かしめる處れがある。

苟くも地位、名譽あるものが、國民の思想に悪影響を及ぼすが如き不信行爲を敢てした時は、地位、名譽なきものゝ不信行爲に對するよりも、より嚴重な處分に出ると云ふとにしなければ、夫れが爲めに、却て國民を惡道に走らせる様なとに爲る、昨今に於ける幾多の事實にして、明かにそれを立證して居るものが幾つもある。

然るに、大體理窟の上に組み立てられてる法律、寧ろ其法律執行の局に當つて居る法官等にして、ほんとうに能く其法律を活用するものが、果してどれ程あるだらふ、何は備てあき、如何に立派な法律でも、法律そのものは死物である、之を活かすのは全く人に在るとを遺れてはならぬ。

其處で、私は、書出しの吏道振肅のみに立もどる、是まで國務大臣の地位に在つたもの、又貴衆兩院議員等にして、法律に觸れる様な罪を犯したものが、決して少なくない、で、私は、大臣道、議員道の振肅も、吏道振肅を叫ぶと同時に、亦大に強調するの要がありはすまいかと思ふのである。

更に私をして率直に云はしむれば、吏道振肅など云ふ様のことは、只振肅せよと云ふた丈では、是また其實蹟を見ることは、斷じて出來い、故に若し官、公吏にして、忌はしい不信行爲を敢てする様のものゝあつた時は、直ちに其官、公職を奪ふと同時に、普通人に對するよりも、より嚴重な處罰を加へるのが宜しからふと思ふ。

ほんとうの處を申せば、苟しくも官、公吏にして、其職務を瀆す様な行爲を敢てするのは、自から悔ふの甚はだしいもので、假初めにも武士道的魂のあるものに在ては頼まれても、到底出來ること無、處が近頃の官、公吏には、武士道的魂を有つてゐるものが、至つて少ない、實に歎かはしい限りである。

鬼に角、吏道振肅といふのは官、公吏に對し、一種の侮辱をあひせかけたものである、若し官、公吏の中に、氣概のあるものがあれば、直ちに敢乎として辭表を提出、其心情に偽りなきこと、其職責に對し、忠實であることを表明すべき筈であるが、たださう云ふもの、一個半個も現はれて來ないのを見ると、愈々以て吏道振肅を叫ぶの要があるのかも知れない。

(四十八)

吏道振肅、夫れを徹底させるには、無論相當の講究と相當の歲月とを要する、到底一朝一夕のことには行かぬ、で、私は、差當り其勤務時間の延長斷行を提議したい、其れについては、曾て詳論したこともあるが、さらに賛成の聲も聽かず、又反對の聲も聽かなかつた、國民も當の官、公吏も、如何にその喃氣であるかが、容易に推察される。

近來官、公吏、乃至會社員、銀行員等の勤務時間が、大分延長されたやうではあるが、然かもこれを一般國民の勤務時間に比ぶれば、決して長時間であるとは云へない一般國民の勤務時間は、四季を通じて、大抵日出から日没まで、ある、中には未明から夜明けかけて勤務しなければならぬ様な家業もある。

而して一年三百六十五日、定まつた休養日といふのは、一日もない、然るに、官、公吏等は——春夏の永の季節と、秋冬日短の季節とでは、其出退の時間に多少の相違はあるが——四季を平均すれば、大體六時間勤務と見てよからふと思ふ、否、六時間勤務と見るのは、或はひいさ目であるかも知れない。

それから晝食、雑談の一時間、喫煙、便用等の一時間、都合二時間を差引けば、ほんとうに其職務に携はる時間は、正味四時間でしか無い、夫れで少し事務が込入つていも來やうものなら、忙しくてこまる、骨が折れてこまるとこぼすやうなものが、十中八九を占めて居る、實に罰のあたつた話では無いか。

元來人間の責任、人間の光明、人間に生れて來た有がた味は、何處に在るだらふ、身心健康にして、夫れ自身の職業に活動する處に在るのであるまいか、而してその身心健康と云ふことは、何處から來るものだらふ、眞劍に勤務するところから來るのではあるまいか、健康と勤務とは、互ひに因果關係を有つて居る。

今日官、公吏の職にあるものは、概して中學程度以上の教育を受けたるものである

然るに、其官、公吏にして、人間價値に感激、報謝の涙一滴を濺ぐことの出来ないやうなもの、多々あるのは、どういふ譯だらうか、で、私は、まづその官、公吏の勤務時間延長を斷行して、其心底を探ぐつて見るのが、最も面白い手段であらうと思ふ。

(四十九)

歐、米諸國の近來の態度、別けても昨今に於ける伊、獨、露等の行動を見るに、殆んど傍若無人とも云ふべきものがある、伊國のエ國に對する言動はどうだ、獨逸の豪語はどうだ、露國の對極東振舞ひはどうだ、彼等の眼中、果して仁義があるだらうか、人道があるだらうか、温情があるだらうか。

彼等口を開けば、即ち平和を云ふ、親交を云ふ、軍縮を云ふ、更に進んでは、神の教を説き、人の道を語る、然るに、其國際間に於ける云爲は、情義の見るべきものは露ほども無い、之を仁者、義人の眼から見れば、其残忍さは、鬼畜にも劣るものがあるだらう、呆れはてた話では無いか。

強かならずしも挫くには及ばぬ、併し漫に弱を虐ぐるものあるに至つては、之を懲らすの道を講ずるのが、仁義、人道の精神ではあるまいか、儒學は、仁義を教へ博愛

を説す、佛教は、諸惡莫作、衆善奉行を説き、慈悲忍辱を強調す、而して基督教また愛を主張す、然かも、其基督教國を以て呼ばれる彼等の國際的言動はどうだ。

弱いものは、何處までも之を虐げる、強いものには、巧言令色、以て其壓迫より逃れんとに汲々たる状態である、國際條約の根柢は、何處に在るか、世界聯盟は、何を以て居るか、今日の我國は、其仲間はずれの地位に在る、夫れにしても仁義、人道の上から見るに於て、之を默殺するとは出来ない。

我國に比しては、密接な關係のある英、米は、何故あの様な、不得要領の態度に右往左往して居るだらうか、米國は、聯盟外の國である、然かも其歐洲諸國との關係は、我國などとは大に異なるものがある、政治的にも、經濟的にも、將たまた文化的にも——而して英國の立場に至つては、又米國とも大に違ふ。

エ國の現状は、實に可愛さうである、利害關係を別にして、扶けられるものなら、何とかして扶けて遣りたいでは無いか、私ども大和民族には、稜々たる奇骨がある、事情、場合に依りては、身命を賭して、正義の爲めに相争ひ、相闘ふことを辭さない

私は、將來の我國をして、飽迄世界的幡隨院の蹤跡に活躍せしめたい。

(五十)

國體明徴、日本精神鼓吹と云ふのが叫ばれて來たので、其琢磨材とも云ふべき儒學佛教が盛んに提唱されて來た、隨て夫れが出版界にも反映して、漢籍、佛典の豫約出版などが諸處に企てられ、日々新聞紙上の廣告欄を賑はして居るが、其熱氣は、何處まで持ち續けられるものだらふ。

又儒學、佛教に關する講座とか、研究會とか云ふ様なものも、彼方此方に開催されるが、其處に集ひ來る人々は、全體どう云ふ種類、階級に屬するものだらふ、更に夫れに就て、詮議して見たいのは、年よりも多いか、若いものが多いか、男女何れが多いかと云ふことである、併し何れにせよ、面白い現象である。

古來我國の思想界に、重大な影響を與へたものは、確かに儒學と佛教とである、明治維新以來、西洋流儀の學問、宗教の刺戟を受けたことも、決して尠少では無いが、然かも之を儒、佛から受け影響に比べて見ると、到底同日に談すべからざるものがある、夫れには相當の理由がなくではならぬ。

處が明治維新以來、西洋流儀の學問、宗教が、盛に輸入せらるゝや、ある時代までは、萬事西洋流儀でなくては、埒があかぬといふことになり、儒學、佛教は、一種の骨董品として、土藏の一個に片付けられて了ふ、と云ふが如き慘憺たる状態を見るに至つた、さう云ふ際に在て、其機運に對し、疑念を懷いて居たものが、果してどれ程あつたらふ。

一時、政治家も、學者も、教育家も、年よりも、若いものも、あしなべて西洋崇拜に走つたのは、何人も尙其記憶に新たな處であらふ、然るに、世界大戰後——この十數年來、俄かに目ざめたるもの、如く、頻りに國體を云々し、日本精神を禮讚するもの現はれて來たのは、又實に不思議な情勢の様にも思はれる。

其情勢が、愈々濃厚と爲つて來て、昨今に至つては、出版界においても、教育界に於ても、思想界に於ても、乃至政治界、經濟界に於ても、國體に關する議論や、日本精神に關する獎説が、大に歓迎され、又大なる勢力を有つて來た、が、其結論は、至竟何處に落着くものだらふ、今後の問題は、即ち夫れだ。

昭和十一年十一月三日印刷
昭和十一年十一月七日發行

【定價二十錢】

著者

武市

如意

長野縣上田市新參町五五六二番地

印刷兼
發行人

武市

如意

長野縣上田市新參町五五六二番地

印刷兼
發行所

北信每日新聞社

323
5-13

